
冥獄抄散話（めいごくしょうさんわ）置物語

銃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めいごくしょうさんわ
冥獄抄散話置物語

【Nコード】

N9906J

【作者名】

銃

【あらすじ】

「冥獄抄散話シリーズ」の番外編集です。

【裏置き】「堯湖」、出会いがしらに孕ませる（前書き）

どおも銃です。銃と書いて「チャカ」です。

これは息抜きで何となく書いたお話です。御殿事情も少し書きたいなアと思ひまして…。

【題名があれですが、別に18禁ではありません。】

【今回はたぶんないと思いますが、いずれ残酷描写ものが入ります。】

「堯湖」が御殿来たての頃のお話です。

何だか色々とネタばれしているような気がします。

ちよっと書いている方としてはそれがどの位の度合なのかよくわかりません。

（文章も問題ないのかよくわかりません。）

が、まあ特に問題ないでしょう、はい（適当）。

それではどうぞ次頁よりお入りくださいませ。

それではまた本編にて、拙筆ながら今後ともお付き合いいただければ幸いです。

銃・

【裏置き】 「堯湖」、出会いがしらに孕ませる

【裏置き】 「堯湖」、出会いがしらに孕ませる

一

黒ノ赤子の西の指。

ここにとある冥獄の主一人の為だけの無限極楽が存在する。

主の名を「極楽貪主」。

無限極楽の名を「呆蝶宴」。

今回は、その宴が開かれている御殿の一角で起こった小さな出来事のお話である。

宴が開かれている三の殿「豪盛」の音も微かな御殿の辺境「夭折群殿」、その一つの渡り廊下。

そこに堯湖はいた。

堯湖はそこにいたが、そこというのが何処か堯湖にはわかっていなかった。

そう……堯湖は——

「迷ってしまいました……。」

家を忘れた迷い犬のようにあちこちの廊下をうろうろと顔を突き出していた堯湖はついに音を上げる様に、というかもろに音に出して

弱音を吐いていた。

まだ護兵としてこの御殿につかえ数十年と日の浅い堯湖。
その彼がどうしてこんな事になってしまったのかという少し時を
遡る。

「……………」
「……………」

殿の宴に供される食事の為の食糧庫「慢常」まんじょう
そこがまだ新米護兵の堯湖の常の持ち場であり、つい先刻までいた
場所であった。

「……………」
「……………」

そんな堯湖と共にこの食糧庫を護っているのは、御殿に来てすでに
数千年という寡黙の武人「塵蟬」じんぜん。
しかつめらしい顔をして瞳を固く閉じ、いかにも武人といった態で
筋骨隆々とした腕を組み合わせている様は、見る者を何とはなしに
威圧した。

「……………」
「……………」

至って寡黙で用向きが無い限り微動だにしない。
その腕に握られた斧の先にひらひらと極楽蝶が止まる。

堯湖はそんな「塵蟬」の様子を時折惚れ惚れと見つめた。

ちなみに二人の間に会話が無く蝶がひらひらなどというところが至って静かな場所のように感じられるが、実際はというとそういう訳ではない。

蔵のすぐ目の前には炊事場が広がり無限の極楽を作る為に日々地獄のような忙しさで人々が走りまわり、罵声と調理の音で騒々しい事限りなしとなっていた。

「あぁッもうちげーよ！そりゃ仕込みの最中だろーが！」

「薪ッ薪ッ！全然足んないよッ！早く持ってきてー！」

「おいッ！早く誰か出しに行け！冷めたのなんか出したら殺されッぞ！」

「あー！どいてどいてッ！危ないよ！熱い鍋通るかんねっ！」

「……………」

「……………」

堯湖は蔵の前でそんな喧騒を大衆劇でも見るかのようにぼんやりと見つめていた。

たまにそこから食料の調達に来る下男下女の為に蔵の錠を外したり、蔵の周りを巡回しさぼったりしている者がいないか確認するのが堯湖の仕事となっていた。

————ふうん……………」

堯湖がはっとして隣に立つ「塵蟬」を見る。

「塵蟬」はというと鼻から息をもらしてからやや置いて、ゆっくりとその瞼を持ち上げた。

その下から獣のように鋭い眼光が現れる。「塵蟬」を取り巻いていた空気がさらに緊迫した重いものへと変わった。その波動を受けて堯湖はわずかに身じろぎのどを鳴らす。

「堯湖…。」

「はっはい!」

逞しい肉体に相応しい野太く威圧感の在る声が堯湖を呼ぶ。

斧の上の極楽蝶が宙へと舞った。

「塵蟬」は組んでいた腕をゆっくり解くと、おもむろに己の胸元から一つの小さな黒い冊子を取り出した。

ちらとも見ずにそれを堯湖に向けて差し出す。

「仕事だ…。」

「はッ…え…?」

冊子を受け取りながら堯湖はときまきと答える。

「その冊子の始めの頁に書かれている者の所に回り、それを見せる。出来るな?」

「え…あの、これはどういう—」

と聞きながら堯湖は冊子を開こうとした。

「見るな。」

間髪入れずに「塵蟬」の深い声がその動作を禁じる。

「始めの頁以外は決して見るな。」

新米のお前がまだ知っていない事ではない。」

——新米のお前がまだ知っていない事ではない

何やら秘密の香りを感じた堯湖はまた一つ生唾を飲み込んだ。

「そこに書かれている者以外には決して見せるな。
なるべく人の目を避けて動け。

もし他の者に用向きを聞かれたら必ず秘を示せ。」

そこでゆっくりと「塵蟬」が堯湖を見据える。

稲妻のような鋭さが堯湖の瞳を貫く。堯湖は思わず両の腕に鳥肌を
ほとばしらせた。

「出来るな？」

——出来るな…それは、信頼の言葉。

僕を……この僕を秘密の任務の使いに出すに足ると認めて
くれた証。

「も……ッ。」

「勿論ですッ！この堯湖にお任せくださいッ！」

堯湖は頬を真っ赤に上気させてこの任を拝命した。

ちなみにこの「塵蟬」が実は威圧感ばかりの見掛倒しで、一部裏で
は寡黙な遊び人として有名で、この時堯湖が拝命した黒の冊子は博
打の参加者募集名簿兼戦績貸借金簿であった事を堯湖はついぞ知る
事はなかった。

そしてこの任を「塵蟬」の元から離れる数百年後まで疑いもせずに
堯湖は続ける事となったのである。

そして現在、今に至る。

堯湖は完全に迷っていた。

秘密の任であるからあまりおおっぴらに誰が何処にいるのか行く先々で尋ねる事も出来ず、気づけば尋ねる人すら見当たらない程人気のない所まで来てしまっていた。

——困った事になってしまった。

堯湖はやや早足で廊下を急ぐ。

——こんな人気のない所で人に見られたらかえって怪しまれてしまう。

堯湖は小走りで廊下を急ぐ。

——かといって人に尋ねずに戻る事も難しそうだし…。
でも、人に会うのもまずいし…。

堯湖はほぼ疾走するがごとくに廊下を急ぐ。

「あーっ！もう！やっぱり誰でもいいですから誰か出てきてくださいよオッ！」

堯湖がその泣き言を叫び終わるのとその人に出くわしたのはほぼ同時だった、

横の廊下から突然飛び出してきた人影に全力疾走の堯湖は思い切り激突しその反動で尻もちを付いていた。

それは衝突した相手も同様のようで横の廊下から飛び出した人影はまた一瞬で横の廊下へと吹き飛び、派手に尻もちをつく音が聞こえ

てきた。

「……ったア…。」

———女性の声！

「すみません！大丈夫でしたか？」

堯湖は尻が痛むのも構わず四つん這いでわずかに進み横の廊下に顔を覗かせた。

「あ……！」

思わず声を出していた。

やはりそこには女性が尻もちをついていた。

「相^{そう}」は紅歴の半ば（外見年齢二十から二十五位）といった所だろうか？

堯湖よりはやや上の相をしている。

肩までの黒髪、落ち着いた濃紺の衣に灰色の長羽織。

顔立ちはすっきりと整い強い意志を感じさせる凛々しい眉とその下のぱっちりとした黒い瞳が印象的な女性だった。美人といえない事もない。

しかしそれより何より堯湖の瞳はその女性のある一点に釘づけにされ声を上げていた。

それは———

「もオッ！どうしてくれる！」

いきなりぶつかるから孕んでしまったじゃないかッ！」

そう、その女性は丸々と孕んでいた。

「ええええええええええええええええっ！」

堯湖が半ば素っ頓狂な阿呆くさい驚嘆の声を上げる。

その声に逆に女性は驚かされてあっけにとられた。

そんな女性の目の前で堯湖が一人壮絶な苦悩と後悔を見せている。

「そっ…そんな僕は…僕は何て事をッ……。」

堯湖が頭を抱えて苦悩する。肩と顎先をふるふると震わせその女性の腹を凝視する。

堯湖は目の前の女性が

「はぁ？こいつ何言ってるんだ？」

んな事ある訳ないじゃん。馬鹿か？」

という表情をしているのも気づかず一人苦悩を続ける。

「まさかそんな…触れるだけで孕ませてしまうなんて…。

そんな馬鹿な事が…でも実際目の前にその現実がある訳だし…。

奉公に出されてるような半人前の僕がもう所帯を持つ事になるなんて…。

僕は…僕は一体どうしたら…。」

堯湖は目の前の女性が

「いや…どうもしなくていいから…。

むしろどうするかな…この面倒くさいの…。」

とほぼ投げやりで冷めた表情を浮かべているのにも気づかない。

と、そこへばたばたと近づいてくる足音が廊下を響き渡った。

その女性はびっくりとし自分の後方の廊下を振り返る。
みるみる内に大きくなる人影。
そしてそれはその女性の後ろで立ち止まった。

「はあっ…もう！困ります。
勝手に出歩かないで下さい。」

堯湖と同じ位の相の背の小さな女性。
頼りなさげな顔に眼鏡を乗せ、薄い桃色の柔らかい髪の毛を一本のお下げにしている。

一見華奢に見えるその体は大人の武人のように完全に武装をしている――

「あ……………」

堯湖は目を見開き驚いた。
そこに立っていたのは誰であろう――

「「こうさつ洗殺」さま……………」

「極楽貪主」の身边に侍る護兵が一人、御殿でも最強の怪力を誇る素手の武人「洗殺」だった。
息を切らしおどおどとした様子をしていた「洗殺」が床に座り込む女性を見、堯湖を見て顔をやや引き締める。

「これは…何があったのですか？」

「あっ…………その…これは…………」
すっ…すみません！僕がいけないんですっ！
ちゃんと確認しないで走ってて出会いがしらにぶつかってしまっ
て…。」

「ぶつかって？」

「洸殺」が眉をしかめる。

「それじゃあ…堯湖ちゃんはぶつかって転ばせてしまったという事ですか？」

「え…！僕の名前、知って下さってるんですか？」

堯湖の顔がぱっと明るくなる。

「それは勿論。同じ護兵仲間ですから。

それより堯湖ちゃん、貴方何て事を……。」

堯湖の華やいだ顔が一気に暗転して絶望の色を見せる。

堯湖はふるふると拳を握ると、そのまま頭を前面の床に叩きつけた。

「えっ…？」

女性二人の驚きが重なる。

堯湖はそのままの体勢で半泣きの様な声を上げて叫んでいた。

「覚悟は出来ていますっ！

故意でなかったとはいえ僕が成した過ちッ！

僕は…：僕は彼女と共に生き、成してしまった二人の子を全うに育てていく所存ですッ！」

「はい………？」

「洸殺」の眼鏡がわずかにずれ落ちる。

そのわずか手前の孕み女性の灰色羽織も肩から音も無くずり落ちた。

「あ……堯湖ちゃん：あなた何か誤解を——」

「いーけないんだはらませたあー。」

だあーんなさんに言ってやろー。」

「洗殺」の言葉を遮るように、変な節をつけた歌が堯湖の背後から響き渡る。

——え？

堯湖は床に頭を打ち付けた状態から背後の人物を盗み見た。
そこにはひきずるように長い裾着を履いた人型の足が見えた。
堯湖はゆっくりと顔を起こし後ろの人物を見上げてまた絶句した。

「……………あ。」

いや、「あ」って言ってるねこのメガネ君。

「いちれんちゃんっ！」

「あ……ああ！……そうっそうそう！その人です！」

貴方は「一漣撃」いちれんきやくさまっ！」

「……………」

なんか君、それ失礼極まりない言い方だよねえ？

まあ、別にいいけどさあ…。」

と、ものぐさそうに呟いたのはやはり「極楽貪主」に侍る護兵が一人「一漣撃」。

護兵のみならず「極楽貪主」の傍に仕える者なら婢はしためまでもがその存在を知り、護兵であるにもかかわらず相当数がその顔を知らないと

いう珍奇な人物。

前者はいいとして後者は何事かとなるが別に後者も全く知らない訳ではない。

まずこう言えば「一漣撃」を知っていると答えるだろう。

「『極楽貪主』の隣で居眠りしてる護兵」と――。

……つまりこの人は、恐れ多くも普段そういう事をしちやっている護兵である。

見かけは背が高い事を除けばかなり女性的な人物。

瓶覗きを思わせる薄い空色の髪を肩に流し、左耳の辺りに緩く結びを作っている。

服は「洗殺」のそれとは違い胴巻以外には全く武装が見られない。

着物を首にまきつけそれを外套のように羽織り、袖も裾も必要以上に長くとても戦う人間のそれではない。

その手に握る得物も短い握りに肌触りのかなり良さそうな毛の束が下がる虫払いという優しさ仕様。

「もう隣にいるのが当たり前過ぎて、いないと落ち着かないから良いのじゃ。」

という「極楽貪主」の発言で、護兵の優劣を選定する「決戦」を免除された強いのか弱いのかよくわからない謎の護兵「一漣撃」その人が堯湖の後ろに立っていた。

とろんとした伽羅色の瞳が堯湖を捕える。

そこには「塵蟬」のような威圧感は露程も感じられない。

けれど何か、それが何かはわからないけれど堯湖は何か匂いのようなものを一瞬感じた。

雲一つない快晴の日に暮れの夕立ちを予感する、そんな感覚のわずかな匂いを…。

「いちれんちゃん！何変な歌歌ってるんですか！」

「あれえ？知らない？この歌あ。」

「知らないって、そんな変な歌ある訳ないでしょ！」

「いやあこの調子の歌だよお。「学」で聞いた事ない？」

「「学」って…私は孤児だから「学」には通ってないんです。」

「ああ…そうだったのお？ごめんねさっちゃん。」

そう言って「一漣撃」は「洗殺」に近づくとぽんぽんと軽く頭を叩いた。

「洗殺」がやめて下さいと騒ぎながら両手を振っている。けれどその手はすらりと背の高い「一漣撃」に届く事無く空しく空をかきまぜていた。

そんな何だかほほえましげな光景を目に移しながら堯湖はぼんやり考える。

———今……歌の中で何か……何か酷く恐ろしい文句があったよ
うな…。

確か……。

———ダァーンナサンニイッテヤロ♪……

だぁーんなさんにいってやろ♪……

だぁーんなさんに……

旦あーんなさんに……

！
旦那さんに……

「旦那さん……?」

堯湖かぼつりと呟く。

その呟きにどたばた騒いでいた「洗殺」と「一漣撃」の動きが止まり、それを眺めていた孕み女性も堯湖の方へと視線を移した。

「え……あの……彼女……は……」

堯湖がかたかたと震えて半ば顔面蒼白になりながら「洗殺」と「一漣撃」を見つめて言葉を絞り出す。

「洗殺」が何か言おうと口を開くと同時に、もう「一漣撃」が声を発していた。

「人妻だよお。堯湖くん。」

「ヒッ……ヒトオッ……!!」

———そんなっ……僕は……よりもよって人妻を……

「堯湖ちゃんッ!」

「あー……。」

「え、ちよつと!」

「ヒ……ヒヒヒ……」

堯湖はくねくねと力無くその場にへタレこみ、そのままだらりと後頭部を床に叩きつけて昏倒した。

「なんてっ……貴方は何て事をっ……！」

「まっ……待ってください！母様っ！聞いてください！僕は……僕はそんなつもりじゃ……。」

「ええ！ええ！そうですともっ！」

つもりなんてなくても子は孕むものなんですから！

情けない事を言うのはもうおよしなさい！ただでさへ情けない事を貴方はしでかしたの　ですから！」

「でっ……ですが母様……。」

「本当に……本当になんて情けない事を……。」

「母様……母様！……そんなっ……泣かないで下さい！」

「よりによって……人の方に……よりによって間男をするなんて……。」

「マッ……。」

「堯湖^{たかこ}兄様……最低……。」

「信じられない……。」

「不潔よ……。」

「良い子だと思ってたのに……。」

「親不孝者だよ全く。」

「ちっ……ちが……待って……みんな……待ってよ！」

みんなっ……僕の話聞いて！……聞いて！」

「待ってよっ！」

堯湖はがばりと起き上がりながら目を覚ますと手の平を空へと伸ばし何かをつかんでいた。

上質な灰の衣。ぱっちりとした黒い瞳が堯湖を捉えた。

「あ……………」

「…びっくりしたわ。」

ほんと、君って私をびっくりさせてばかり。」

そういうとその孕み女性はふっと凜々しく微笑んだ。

堯湖もその微笑みに寂しく笑い返すと、ゆっくりと体を動かした。体の支えに手をつくと柔らかい感触をつかむ。

堯湖の体はふかふかの布団の中にあつた。

「あっ…っ……！」

突如忘れていた激痛が頭を突き抜ける。堯湖はしたたかに打ち付けた後頭部に手を添えた。

「大丈夫？」

孕み女性は堯湖にのそのそと近づくと両の手を堯湖の後頭部にまわして、その箇所を窺った。痛みが走らないようそつと軽くその部分をさする。

堯湖はされるがままに頭をやや下げてさすられていた。

すぐ目の前には大きなお腹がある。

堯湖はそつとその女性のお腹に手を乗せた。

堯湖の頭を窺っていた女性の手の動きがぴたりと止まる。

「もうこんなに大きい……何時産まれるのでしょうか？」

「さあ…いつかしらね。」

堯湖の頭の少し上で女性が静かに答える。その吐息がわずかに堯湖の額をくすぐった。

「男の子かな……女の子かな……？」

「君は……どっちがいい？」

女性の質問に堯湖がゆっくりと顔を上げる。

目と鼻の先に女性の顔があり、そのぼつちりとした瞳が堯湖を捉えていた。

堯湖はその瞳を見据えて言葉を返す。

「……女の子がいいです。」

「どうして？」

堯湖の答えに女性が悪戯っぽい笑みをたたえて質問する。

堯湖はまた女性のお腹に視線を落として言葉を紡いだ。

「僕の血筋の男子は皆ひと振りの刀を持って生まれてきます。

それで母親の腹を切り裂いて生まれてきます。

それがもとで亡くなったという母親の話を聞いた事もあるし、それがもとで子が二度と産めなくなったという母親に話を聞いた事もあります。

出来れば幸せになってほしいから……。

僕は生まれた瞬間から自分の子にそんな業を背負わせたくないし貴女を傷つけたくもない。

だから僕は女の子を望みます。」

「ふうん……。」

孕み女性はそれだけ息をもらすとちらりと布団の脇に揃えて置かれている堯湖の刀に目をやり、そして堯湖に視線を戻して呟いた。

「でも君、二振りあるよね？」

堯湖の顔が強張る。その顔の変化を気にも留めず女性は続ける。

「普通は一振りなんだよね？でもここには二振りある。
どうして？」

「……。」

「どうして？」

「……それは……。」

「それは？」

「……奪ったからです。」

堯湖はひどく冷たい声を絞り出すように吐いていた。

女性は涼やかな顔に表情をつけずただ堯湖を見つめる。

「……一振りは僕のもんです。けれどもう一方は僕の兄弟のもんです。
僕が……。」

「僕が兄弟を殺して奪った刀です。」

「そう。」

女性は何の感慨も込めずそれだけ言い、蒲団の傍らに置かれた二刀に手を置いた。

「だから君すごく血生臭いんだね。」

「……血生臭い……血……。」

爆ぜるかがり火。陰影を付けて何処までも広がる兄弟達の亡骸。
手に残る人殺の感触。耳を覆いたくなる絶叫。

死にたくねえよ……ッ！

堯湖は脇腹の傷跡をそっと押さえていた。

「なら私は男子がいい。」

女性のはっきりとした言葉に堯湖は顔を上げた。ぱっちりとした瞳が堯湖の弱弱しい瞳に食い込む。

「ここじゃ強くなくちゃ生きていけない。

生まれた瞬間から親を殺す。その位の業を持つての方が私は嬉しい。

文字通り、腹を痛めた子に殺されてそれを糧に強く生きていく。くれるなら私は本望だよ。」

唇の端をわずかに上げて女性は笑んだ。

冗談とも思えない強くはっきりとした眼差し。

——この人、強い人なんだ……。

堯湖は思わず見とれた。

と、女性の腹に触れていた堯湖の手の平が小さな動きを捕える。思わず驚きの声を上げていた。

「うッ……動いたアッ！」

「動くよ。生きてるんだから。」

そういうと女性は堯湖の手の平の上から自分のお腹を包むように支えた。

その優しさに気づいたのか、腹の中の赤子は何度も何度も元気に腹を蹴飛ばしている。

「う……わぁ……。」

堯湖は何ともいえない感動に嘆息していた。

そんな目をきらきらとさせて感動している堯湖を見て女性がくすり

と笑う。

「耳当ててみる？」

「えっ…いい、いいんですか？」

「いいよ。」

「あ…じゃあ、…ちよつとだけ…その、お言葉に甘えて…。」

堯湖は少し恥ずかしそうにしながらそつと女性のお腹に両手を置いておそろおそろ耳をそのお腹に近づけた。

「……？」

堯湖は耳をつけて固まった。

———音が……しない。

女性の腹の中からは赤子の胎動だけでなく、常の「生人」いきびとならあるくぐもった臓器の脈動すら聞こえてこなかった。

堯湖がさらに耳を女性の腹に押しつける。

するとそれは聞こえた。

「俺が手前エみてえな軟弱野郎の餓鬼な訳ねえだろ？」

それは酷く熟成した、いわゆる中年男の濁声だった。

「ヒイツ!!!」

堯湖は思わず布団を跳ね飛ばして飛びのき、その激しい動きに後頭部を痛め頭を押さえるやらくらりとするやらもうとにかく取り乱しまくった。

そんな堯湖の過反応に孕み女性はくくくと袖で口元を隠して笑う。

そんな孕み女性を指さし堯湖は口をぱくぱく目を白黒させている。
そんな堯湖について堪え切れず孕み女性は大口を開けて笑い始めた。

「あっはっはっはっはっは！」

君、本当に良いね！面白いよっ！あはっ！面白い！」

しまいには自分の腹をばしばし叩いて笑い出す。

その挙動に堯湖は己を取り戻し先程までとは別の意味で取り乱した。

「ちょっ……そんなにお腹を叩いては赤ちゃんが……！」

「ん？この位全然何ともないよ。」

それに私はそんな弱い子を産むつもりはない。

この位で死ぬなら生まれてくるなと言いたいね。」

そう啖呵を切ると手首まで食い込む位、赤子どころか自分すら悶絶しそうな強力な拳打を己の脇腹に叩き込んだ。孕んだ腹が水面のようには波紋を描く。それでも彼女はけろりとカラカラ笑っていた。

———本当に強いよ、この人。

堯湖は少し寒気を覚えた。

———これは一生尻に敷かれるかもしれません…。

そこではたと思い至る。

———ん？一生というより…そう、そういえばさっき…。

堯湖はゆっくりと孕み女性の腹を指さす。

「僕の子じゃ……ない？」

「当たり前だよ。童貞君。」

いちいち体当たりの度に孕んでなんかいられない。」

「っ…………。……………」

堯湖は色々と本当の事を言われて口をつぐんだ。
そんな堯湖を見て女性はまたくすりと笑い堯湖にゆっくりと近づくと、堯湖の頭を母親がするように優しく撫でた。

「いじめてごめん。でも君、本当に面白いから。」

「……………」

堯湖は何だか気恥かしいのとその手の感触が気持ち良いので、孕み女性にされるがままに頭を撫でられていた。

三

「貴女は誰なんです？」

やっと事態を飲み込み落ち着いた堯湖^{たかこ}が質問する。
質問しながら辺りを見回す。

簾も畳も調度も全て使用人の部屋のそれではない。

堯湖が寝かされていた布団も毎日きちんと洗い干されているがごく清潔でふかふかとしている。

目の前の女性を追っていたのは「極楽貪主^{ごくらくどんす}」の腹心「洗殺^{しょうさつ}」。おそらくその後突如現れた「一漣撃^{いちれんきやく}」も同じ理由で現れたに違いない。

……………御殿の奥で腹心二人に追われる女性……………
……………

堯湖のおぼろげに導き出された予想に気づいたのか孕み女性はまたくすりと笑う。

「私の事の前にとりあえず騙してたお詫びをさせてよ、堯湖くん。」

名前を呼ばれてびっくりとする堯湖。おそろおそろる孕み女性に尋ねる。

「お詫び？」

「そう。そうだな、私これでも占いが得意だからそれでいいだろう。得意といっても自分の思い通りに未来を変えられるかの占師「攫噬かくせい導どう叟そう」程じゃないけどね。」

「今この瞬間、一番あり得る運命を告げる事は出来る。」

まっすぐな強い瞳。

———そう、思えばこの瞳…そっくりだ…。

堯湖は生唾をぐくりと飲み下す。

孕み女性は堯湖の言葉を待たずして話を先へと続けた。

「そうだね。君の本当の連れを見てあげよう。」

そういうやいなや孕み女性は堯湖の首の頸動脈を目にも止まらぬ速さで掴んでいた。

爪がわずかに食い込み血がにじむ。

勿論苦しくない訳がない。

堯湖は息を詰め一瞬で意識が飛びかけた。けれどそれは叶わなかった。

その孕み女性の瞳と目が合った瞬間、意識が、その魂がそこから動く事が出来なくなっていた。

———………魂を絡め取る…瞳…。

「……ッ………が…。」

堯湖は顔を真っ赤にして全力でもがいた。

本能的に自分の首を掴んでいる孕み女性の腕を掴み必死に引き離そうとする。

手加減は一切していない。

けれどその孕み女性の腕は堯湖の首に吸い付き離れる事はなかった。思い切り掴んでいるのに傷を付ける事もかなわない。

耳の奥でがんと響く心臓の音。次第に赤みを帯びていく視界に浮かぶぱっちりとした黒き瞳。

ふいに堯湖の首と魂が解放された。

「……っげぼッ……かッ……、」

止まっていた血が一気に体を駆け巡る。

汗をどっと噴き出して堯湖は首を押さえ何度も噎せた。

半ば意識を朦朧とさせてうずくまる堯湖に構わず孕み女性は託宣を告げる。

「君の連れは夜の様な女だ。暗く冷たく、けれど哀しく美しい。

君達は固く結ばれる。」

「誰もが羨み忌まわしく思う程、それはそれは固く。」

堯湖は自分の運命を言われているにもかかわらず、ほとんどそれを見分ける事が出なかった。

夜の様な女、その一言だけが知らず堯湖の心の奥底に波紋を残して沈んでいった。

「じゃあ私の話に戻ろう。」

孕み女性は爪についた血をぺろぺろと舐めながら言葉を繋げた。

「だがね、私の名前「愛し名」だから全部教える事は出来ないんだ。あ、「愛し名」は知ってる？」

堯湖がぼんやりと首を押さえながら孕み女性を見上げる。

肯定も否定も見せない堯湖に孕み女性は説明を始める。

「「愛し名」は親の名の一部を含んでいる名の事を言う。

親の名といっても「極楽貪主」とか「攫噬導叟」とか、いわゆる「肆号」の事じゃない。

本当にその者が生まれもって名付けられた「真名」の事。

「真名」は時に魂に繋がる。それが「肆号」を持つ者のものとなると大変だね。

一文字でも知られると弱みになったりする。

だから私の「真名」は私と父上様しか知らない。」

——「愛し名」……親の名前の一部を含む……それは…。

「僕も……「愛し名」です。

母様の一字を……いただいています。」

堯湖が少しかすれた声で言葉をもらう。

そんな堯湖を見つめて孕み女性はにっこりとほほ笑んだ。

「そうなの？良かったね。

それはとても誇らしくて嬉しい事。

「真名」を分けるといふ事は己の魂を半分分けるようなものだから。」

魂を分ける……愛しさを命に込めて…。

——母様……。

堯湖は集落に残してきた母親を思い出し思わず涙が出そうになった。

「だから私は人前で父上様の「真名」を隠して自分を紹介する。
つまり半分だけ名乗る。」

孕み女性がゆっくりと堯湖に近寄る。

そのぼつちりとした黒い瞳が堯湖を吸い込むように近づいてくると
ふいに横にそれて耳元で小さく囁くのを堯湖は聞いた。

「私は「甜^{てん}」。舌に甘いと書いて「甜」。」

「「甜」……………」

堯湖も孕み女性、いや「甜」と同様に小さく呟いた。

「甜」の顔が堯湖の脇からすつと離れる。と同時にほっとしている
自分がいる事に堯湖は気づいた。

「まっ……半分名乗っても大抵の者は私をそうは呼ばない。

そう呼ぶのは人前で父上様や私の連れ位。

ここでは——」

「……知っています。」

堯湖が「甜」の言葉を遮り喉を押さえつつも畏まった姿勢を見せる。

「甜」がそんな堯湖を見て唇をわずかに引き締める。

「貴女は……っ！」

堯湖は言葉を閉じた。「甜」の指先が堯湖の唇を制していた。

「それは私が言う。」

言いたくなったらね。

それまで君は私の友人だ。」

「あ……。」

「君、面白いしかないから。」

「……………」

「弄りがいがある。」

「……………」

堯湖が俯いて困っている姿を見てにっこり笑うと「甜」は「洗殺」の名を呼んだ。

すぐさま「洗殺」が襖を開けて室内に現れる。ずっと控えていたらしい。

「堯湖くんを送ってあげて。」

たぶん一人じゃ帰れないから。」

「あ、えと……あ……」

「私の事は——」

「甜」が瞳の陰と声音を少し強くして堯湖に詰め寄る。

「名前で呼ぶ。」

堯湖は少し後ろにたじろいだ。強犬に怯える子犬のような瞳で「甜」の真意をびくびく窺う。そんな堯湖の様子を見て「甜」はうんざりとした顔を見せた。

「ほら、いつもそれだ。そうやって私はいつもここでは特別扱い。」

それってすぐ詰まらなくて肩が凝るというのに。

一人じゃないのにずっと一人。ずっと一人なのに必ず誰かに監視されてる。

そういうのいららするだろう？

だから本当の一人になりたいくて私はたまに逃げてしまうんだ。」

ですからやっぱりそれは困りますうーと「洗殺」が泣き言を上げている。

いや、実際問題涙をわずかに浮かべている。相当手を焼かされているらしい。

そんな「洗殺」を見て堯湖はぼんやりと思った。

「極楽貪主」の腹心の護兵でも苦勞しているんだな、と……。

そして、「甜」も——

一人じゃないのにずっと一人——。

苦労しているんだなと堯湖は思った。

「わかりました……その…「甜」さん。」

堯湖がその名を呟くと「甜」は少女のように華やいだ喜びの色を顔に浮かべ、一方「洗殺」は驚きの色を顔に見せた。

「でも……大丈夫…なんででしょうか。その……」

堯湖はこれから初めて姑息な悪事に手を染める下っ端のようにおろおろしながらそつと尋ねる。「甜」がにっこりと微笑んだ。

「大丈夫も何も君は私が「甜」という女だという事しか知らない。

「甜」という女を突き飛ばし、「甜」という女に担がれてここま
で運ばれ、「甜」という女の腹に耳をあて、「甜」という女の「真
名」の半分を知ったに過ぎない。」

「それだけに過ぎない。」

堯湖は一気に血の気が引いた。

———これはもう……謝れば許してもらえる類の話じゃない……。

「そう、ですね……。」

堯湖は事の重大さに抜け殻と化した。
他人事のようにとりあえず言葉を繋ぐ。

「僕は……何も知りませんから…。」

堯湖は遠い目をしながら呟いた。いや、呟かされていた…。

こうして堯湖は秘密の友人を一人得る事となったのであった。

憐れで間拔けな堯湖のお話はとりあえずここでおしまい。

最後に御殿の中の事について少し小話。

御殿。そこは「極楽貪主」が住まう夢の楽園。

そこでは「極楽貪主」が唯一絶対の主。

誰もが彼の命に従い、彼を唯一敬う。

だがそこにもう一人。

一万年と少し前からもう一人、「極楽貪主」と同等に敬意が払われている人物がいた。

御殿の奥にひっそりと暮らし、ほとんどの者がその顔を知らない。

けれど御殿に住まう全ての者がその存在をぼんやりと知り畏れ敬っていた。

その者の名は誰も知らない。しかしその者の事を皆一様にこう呼んでいた。

「御上様」みじょうさま ———と…。

「御上様」、それは一万年と少し前嫁ぎ先から突如家出てきた「極楽貪主」唯一の実子、「愛し名」を持つ愛娘の事を称する。

何がどうという事はない。

これはただの小話。

堯湖の話とは何ら関係のない話。

そう…何も知らないのだから…。

【終わり】

【裏置

【裏置き】 血刃の妾集落（上）（前書き）

どおもです、銃です。

「堯湖^{たかこ}」が御殿に来る前のお話です。

はつきりいっていつも通り、残念なつじつまはてなな誤字脱字駄文です。

実質4日位でガンガンに書いたので、勢いだけはあるようなないような……（闇）

若干残酷描写あります。あと暗いです。

（ふうン…）と流していただければ幸いです。
では…。

銃・

【裏置き】 血刃の妾集落（上）

【裏置き】 血刃の妾集落

一

———息苦しいけれど、温かい…。時々聞こえる優しい響き…。
僕はここを出ていく…。

そこはきつと明るいけれどこのように温かいだけの世界ではないだろう…。

僕を包んでくれたこの世界…。僕の手握っているものを使えば簡単だ…。

でも僕はそれはしない。…だってこの温かい世界を傷つけてしまうから…。

「おおーい！」「堯湖^{たかこ}」。そろそろ今日は終わりにして帰りますよオ
！」

「あ！はあいっ！姉さま！」

どこまでも広がる赤銅色^{しゃくどう}の草原の中から堯湖と呼ばれる少年は顔を上げてその声に答えた。

この集落でその少年は少し変わっていた。この集落では普通男子は皆袴着を履いている。

けれどその少年は集落の女子のように袴着を履いていなかった。

そして背中には赤銅色の草が身につける穂を沢山入れた籠を背負い手には草刈りがまを握っていた。

これも少年が少し変わっている所の一つだった。何故ならこの集落では男子は普通農作業をしないからだ。

けれどその腰帯にはこの集落の女子が普通差していない刀が差されていた。

この集落の普通の男子がそうするように……。

集落の女達は日の暮れかかる草原の中の細い道を里を目指して進んでいく。

時に皆で歌を歌い時に皆でおしゃべりをし時に皆で大笑いをしたりしながら…。

こここの女達は皆とても明るくとても仲が良かった。

皆、一人の男の妾と娘達であるにも関わらず――。

「あっ白子^{しらす}！」

「雑魚^{ぞうご}だっ！雑魚！」

「おい雑魚！ちゃあんと俺達のおまんまの為にしっかり働いてきたんだろぅなア。」

草原へとつながる集落の入口でちゃんばらごっこをしていた集落の少年達が堯湖を見て一斉にはやし立てた。

集落の女達に囲まれながら堯湖は顔を赤くして黙って俯いた。

「こらっ！あんた達！何回言ったらわかるんだい？堯湖を馬鹿にするのはおよしっていつも言ってるだろ！」

「だってそいつ男のくせに稲刈り行ったりして男じゃねえんだもん

！
」

「袴も履いてないしさあ。」

「何よりその刀！何だよそれ。」

そう言うなりその少年は自分の差している刀を抜いて堯湖の鼻先に突きつけた。

その少年の突き出した刀の刀身は夕焼けよりもさらに深い赤い色をしていた。そしてその色は刀身の中を力強く廻っていた。ちょうど人の体の中を流れる血のたぎりのように…。

「あっ！こら！危ないだろ！」

「おやめっ！馬鹿！」

「あなたのかか様に言いつけますよ！」

「それ以上悪さが過ぎるなら飯ぬきですからね！」

女達が一斉に少年に向かって叫んだ。

この集落では刀を持つ男子が強い。けれど時として刀を持たない多勢の女子の方が強い事もある…。

…というか普段はほとんどそうである。

「……っち。行こーぜ。」

少年は舌うちすると仲間の少年を引き連れて駆けて行った。そしてある程度行った所で立ち止まりくると振り返って堯湖に向かって叫んでいた。

「真っ白な刀差した剣帝の息子なんて聞いた事ねえやつ！お前なんか男じゃねえよ！

ばあゝゝかあっ！」

「こらあゝゝ！」

女達が少年に向かって一斉に叫ぶと少年達はたつたと集落の奥へと

走っていった。

ここは冥獄によくある妾集落の一つ。

妾集落とは冥獄の権力者が一夜限りや飽いた子持ち女を住まわせている集落の事をいう。

この集落を囲っているのは剣帝と名高き「ばいえいしやうてい霾翳猩紅」。

冥獄に剣帝、剣神を名乗るものは数多あれど「西の腕」の剣帝といえばまず名の上がるであろう人物であった。

「ばいえいしやうてい霾翳猩紅」の血統には独特の特徴がある。そしてそれは男子にみられた。

男子は皆母親の腹の中で己の刃を育てて母親の腹を切り裂いて生まれてくる。

そしてその時刃が吸った母親の血で刀身は紅蓮に染まる。

血の巡る刀を携える事こそ「ばいえいしやうてい霾翳猩紅」の子である事の証であり、また妾集落に追いやられている男子達の心の拠り所でもあった。

「本当に……普通に生まれてくるのですから女の子を授かったのだと思いましたよ。」

堯湖のこの手の話になると集落の女達は必ずこんな意味合いの発言をした。

そう……堯湖という少年は男子であるにもかかわらず、己の刀を持っているにもかかわらず母親の足の間から生まれてきたのである。

しかも母親の体を傷つけないと己の体に刃を立てて、泣き声立てずすでに瀕死の状態で……。

己の一部である刃を己に立てて生まれた堯湖の刀は、全くの純白だった。

始めは珍しかったからだろうか……。

堯湖は父の住まう御殿（「ばいえいしやうてい霾翳猩紅」の直接支配する国自体をそう

いう）に住む事を許されていたが数十年の後、母親とともにこの妾集落に住まわされる事となった。

堯湖は父親の顔を覚えていない。何が父親の気に障ったのだろうか。堯湖は集落で女子のように農作業をするように言いつけられた。また男子のように刀を振るい鍛錬を積む事を禁じられた。

「お前みたいな軟弱な餓鬼が誉れ高き剣帝から生まれたってのが気に障ったんだよ！」

一族の恥さらし！」

集落の男子達は皆一様にそう言った。

「……………」

集落の女達は皆一様に黙り込んだ。

……………恥だったんだろう……………。

堯湖もなんとなく物心付いた時にはそう思うようになっていた。

「堯湖の刀の白さは、私にとって恥ではなく誇りです。」

はつきりとそう言うのは堯湖の母親だけだった。

堯湖の母親は「南の眼」まなこにいるといわれる放浪の賢者「毒癘宦女」どくれいかんじょの学士奴隷だったという。

学士奴隷とはその名の通り博学に富んだ奴隷の事で主に主人の研究を手伝う事に従事していたという。

「毒癘宦女」は学士奴隷に己の研究を手伝わせる一方で、その才を売り研究資金を得ていた。

堯湖の母親もそんな「毒癘宦女」の資金繰りの為に「霾翳猩紅」の御殿に売られた者の一人だった。

そしてその才は「霾翳猩紅」のお眼鏡にかなない堯湖を身籠る事となったのである。

「この冥獄では究めた刀の才など何処にでもあります。ですから貴方は知識を究めなさい。」

そう言つて堯湖の母親は堯湖に己の持てる知識の全てを教えていった。

元来体を動かす事は厭わないが刀を振るう事にはあまり興味の無かつた堯湖にとって学問はとても楽しいものだった。

また集落の女に交じつて草原で稲を刈り、洗濯や飯の準備をしながら歌を歌う事も嫌いではなかつた。むしろ他の男子と違い、己で生きる術を身に付けている自分を誇らしくさへ思っていた。

妾集落は冥獄においてとても安全な所の一つといわれている。

堯湖の暮らす妾集落もそうだった。

何故なら「ばいえいしようこう霾翳猩紅」の血の結界に護られている為何びとたりとも侵入する事は出来なかつたからだ。

けれどその一方で中にいる者達も己の意思で自由に行き来する事は出来なかつた。

外へ出る事が出来るのは何百年かに数度の割合で訪れる本家の子供（御殿に住む男児）が訪れた時だけ…。

それもその子供のお眼鏡に適つた者だけで連れていかれた子供は二度と集落へは戻つて来なかつた。

御殿で暮らしていた経験のある女達によればそういった集落から呼ばれた子供達は、男児は雑兵、女兒は貢物として扱われるのだという。

そう：妾集落の子供達は「霾翳猩紅」にとって己の権力と富を生み出す為の道具でしかなかった。

———けれど父様にとって「恥」の僕はおそらく父様の道具にす

られない…。

だからきつと僕はここから一生出られない。

堯湖はふとした折りにぼんやりとそう思うようになっていた。

ここでの暮らしが嫌いな訳ではなかった。

もちろん他の男子に蔑まれるのは堪らなかったが、強く明るくたくましい大勢の妾集落の女達に囲まれて育っていたので（集落の男女比は三対七）ここから抜け出したいと強く思う程ではなかった。

けれど母親のいうように勉学に勤しんでいた堯湖にとって外の世界はとても魅力的だった。

———もっと沢山の事を知りたい……書物や母様の話だけでなく自分で知識を身につけに行きたい…。

自分と同じ年位の男子が御殿の子に連れられて外へ出て行った時、堯湖は強くそう思った。

二

堯湖の暮らす妾集落にその招かれざる来訪者がやってきたのは、それから数十年ののちの事だった。

暮れなずむ夕日、風に囁く草原。

今日もよく働いたと堯湖が顔を上げたその時、その人は遠く草原の奥より胸より上だけを覗かせてこちらへ近づいてきていた。

逆光でその容貌は窺えない。

堯湖以外の女達もふと固まった堯湖の眼の先を捉えそれを察して同じように固まった。

ただ一つの入口とされる正門とは正反対の山の中から近づいてくる影法師。それはそこにいる者達に不吉なものを感じさせずにはいられなかった。

堯湖は草原の中ですくと立ち上がり己の腰の刀をすばやく抜いた。赤銅色の長草が堯湖の刀の動きに合わせてすっぱりと切れ堯湖の周りをはらはらと舞い落ちる。

「堯湖！」

すぐそばにいた堯湖の義母姉の一人が堯湖に叫ぶ。

それに負けない位の大声で堯湖は辺り一帯の女に向けて叫んでいだ。

「皆は里へっ！里の男達をっ！早くっ！」

堯湖より遠く里よりの所で作業をしていた女達は頭をすっぱりと草の中に隠すとそのまま草波を立てずに里の方へと走っていった。

けれどもまだ大部分の女達はそこに留まり様子を窺っていた。その手にしかと鎌を握って……。

「皆っ！…逃げて下さい！…ほらあけすな姉様もっ…僕の傍にいては危険ですっ！」

先程堯湖の名を呼んだ義母姉「あけすな緋砂」に向かって堯湖は叫んだ。

「嫌ですっ！堯湖一人を残して逃げるなど…。私達も戦います！」

「そうだそうだっ！」

女達が鎌を振り上げてその声に応じた。

堯湖は唇をかみしめた。

皆の行動を困ると思う反面それを嬉しく思う気持ちもあり思わず口元が緩みかけた為だった。

———そんな場合ではないのに……皆の気持ち、とても嬉しい。

熱くなりかけた眼頭を軽くこすると堯湖はまたしつかりと刀を構え傍にいる「緋砂」に向けて呟いた。

「…いえ、下がっててください、姉さま…。」

「今更何を言うのです。貴方は刀をまともに振るった事など——」
「…だからです。」

「え……？」

そこで「緋砂」は堯湖から立ち上るただならぬ殺気に気がついた。いつもは純白の刀も夕日を浴びてまるで普通の男子の刀のように燃えるように赤く輝いている。

「…もしかしたら…僕は皆を僕の刀で傷つけてしまうかもしれない。」

ですから僕から離れていて下さい。」

「……堯湖…。」

「…早く。」

「……わかりました。」

「緋砂」は堯湖から離れその近くにいた女達にも呼びかけて堯湖から少し距離をとった。

堯湖はまっすぐに近づいてくる影法師の姿を見据えて構えた。影法師はというと女達が里へ男を呼びに向かった時もその動きに何の変化も見せずにただ淡々と近づいてきているだけだった。

———どうして……何人来ようと構わないというのですか？

それ程の実力を持っているというのですか？

そもそもどうして集落の中へ……。

目的が人攫いなら男達が来る前に事を済ませるはず…なのにそれをしない…。

堯湖は刀を構えながら頭の中で様々な考えをめぐらした。けれどももっともらしい理由を思いつく事が出来なかった。影法師はさらに近づいてくる。その体からは何の感情も感じ取れない。その事がますます堯湖をわからなくさせた。

———殺気が全く感じられない…。

ただの皆殺しが目的という訳でもないらしい。

では、一体何が目的だというのでしょうか…。

ここにはわざわざ結界を抜けてまで得るようなこれといった金目のものなど無いし……。

殺し、金、女…それ以外で求められるものなど——

堯湖が考えている間に影法師は数十歩先にまで迫ってきていた。その影法師が外套を着ているという事まではわかったがまだ逆光の為にその表情は読み取れない。

———とにかく…わざわざ結界を抜けて他人の集落に入る事が穏やかな事であるはずがない。

堯湖は数十歩先のその影法師のもとに一足飛びで飛び込み刀を上から振り下ろした。堯湖は刀を使った事はなかったが決して力がないという訳ではなかった。刀以外の身体能力でなら普通の男子よりも優れているといえたかもしれない。堯湖の刀は影法師の肩口めがけて素早く斬り込まれようとしていた。

それでも相手から殺気はない。堯湖は刀の速度を緩めかけた……。

一瞬だった。それはまさに一瞬の出来事だった。

それまで見える姿にしかその存在を感じ取る事が出来なかった影法師から総毛立つような荒い殺気がほとばしり一足飛びで懷に飛び込

んだ堯湖に向かって突き上げるような激しく重い突きを放ってきた。

———殺されるっ……！

そう思った次の瞬間、目の前で弾けるような音がして己の握る刀に強い衝撃が走った。

堯湖は何とかその衝撃に押されまいと耐えた。しばらくするとその衝撃が緩まり前方の影法師が声を発した。

「……最後の最後で油断する奴があるか？ 死ぬぞ。」

それは意外な事に女性の声だった。目をつぶり歯をくいしばって衝撃に耐えていた堯湖は驚いて目を開けもう一つの事実にまた驚いた。己の刀に相手の刃が押し付けられていた。強い衝撃は相手の刀を受けた時のものだったに違いない。

二つの刃が夕日に染まり赤く燃える。けれどそれは同じ赤ではなかった。相手の刃の赤は堯湖のそれより深く重かった。その色は刀身の中を廻るように動いていた。

そう……まるで———。

「…なるほど、お前が噂の…。

まさか本当に男子が農作業をしているとはな…。」

「貴女は…誰なんですか？」

影法師の女の瞳が堯湖をとらえた。それは若く非常に美しい女性であつた。けれどその瞳の奥からはとても強く激しい光が感じとれた。武道に通じていない堯湖でさへその瞳からその女性が果てしなく強い力を秘めているであろう事を理解する事が出来た。

「私は「紅」^{べに}。「霾翳猩紅」^{ばいはいしょうこう}唯一の「皇女」^{むすめ}」。

「霾翳猩紅」にその名の一字を賜る認められし子が一人だ。」

刀を交えた姿勢のまま、影法師であった人物、「紅」は堯湖にそつと囁くように呟いた。

——父様の「皇女」^{むすめ}！

「……どうしてこちらへ…。」

堯湖もそのままの姿勢で「紅」にそつと訊いた。

「……ただの暇つぶしだ。」

「…え？」

「少し厄介になる。」

「は？」

「他の者には私の素性を話すな。」

「な？」

「羆翳猩紅」の皇女「紅」は一方的にそれだけいうと刀を納め呆けている堯湖をそのままにして女達の方へと近づいていった。

「驚かせてしまつてすみません！

私はただの旅の者。「お夕」^{おゆう}と申します。」

遠くで「お夕」こと「紅」と集落の女達が話す声が聞こえる。さらに遠くからは男達の呼び声も聞こえる。

堯湖はまだその場で呆けていた。

「紅」の素性に驚いたという事もあったがそれ以上に……。

——それ以上に……。

堯湖は己の手に握られている刀を見つめた。

初めて命をかけた真剣勝負…。

相手から発せられる激しい殺気。

終わった今となってはただ怖い経験でしかなかった。

けれど、二つの刃が交わった時……。金属音が耳に響き強い衝撃が

両腕に走った時、確かにその時僕は……僕は……。

「……僕は……少しだけ楽しかった。」

堯湖は草原に吹く風に乗せるようにそっと人知れず呟いていた。

三

「ばいえいしやうこう霾翳猩紅」の「むすめ皇女」、べに「紅」は堯湖との一戦の後すぐに妾集落の者達に囲まれた。

女達は警戒と恐れの中で、男達は刀を抜き殺気を露わにして「紅」を睨みつけた。

皆の殺気に気づいて我に返った堯湖は振り返り皆の所へ駆けていこうとしその場で固まった。

——他の者には私の素性を話すな。

そう、駆けつけて「紅」を弁護しようにも何も話せない。

「紅」の事を話さずに弁護する事は自分には出来ない……。堯湖は様子を見る事にした。

「……旅人と言ったな？」

ここは迷って入れるような所じゃない。旅人がどうしてわざわざここに入ってきた……。――

この妾集落の男子達の中で現在一番の実力者である「かさい夏砦」が刀を向けたまま前へ進みでて「紅」に向かって尋ねた。

「紅」はというと周囲を殺気で囲まれながらも落ち着いた声でその問いに答えた。

「私は色々な所を見て回るのが好きなんです。

特に普通の人が入れないような所を回るのがね……。」

「：確かにここはその通りの場所だ……。」

だからここそこには誰も入ってこれないはず……。

それなのにお前は入ってこれた……何故だ？」

周囲の殺気が鋭さを増した。堯湖の立つ所までその張りつめた空気が伝わってくる。

「紅」はそんな周囲の人々を一通り見渡した後、やはりまた落ち着いた声でその問いに答えた。

「ここ……血の結界でしょう？ だから血を止めればいいんです。

入り込む時だけね。」

「……え・」

「紅」を囲んでいた集落の者達は一瞬目が点になった。

「血を……止める？」

「……そうです。」

「どうやって。」

「頑張って……。」

「普通出来ないだろ。」

「そう……普通は出来ない、でも私は出来る。それだけです。」

「紅」はそれだけいうとにこりと笑った。皆は信じられないといった顔をして「紅」を見つめた。だが「西の腕」の剣帝の結界を抜ける方法などそれ位しかないのも確かで皆は「紅」の言葉に納得せざる負えなかった。もちろん剣帝ゆかりの者以外では、だが……。

「大体妾集落というのは主の血による結界なのでこの方法で中に入る事が出来ます。

ですから私は旅の途中少し体を休めたい時、冥獄で最も安全な所の一つといわれるその中に入る事に行っているんです。

でも何時だったか身を寄せた妾集落は少し大変でした。「北の足」にある妾集落なんですけどね：そこは全て美男ばかりを集めた妾集落で——」

「：いえ、もう結構。わかった。」

語り出した「紅」の言葉を「夏砦」が遮った。一部の女達は軽く「夏砦」を睨んだ。どうやら続きが聞きたかったらしい。

「お夕さん：と言ったか？」

「はい。」

「じゃあここに来た目的というのは：。」

「はい：しばらく休ませていただきたいと思ひまして：。」

休むといっても集落のお仕事は手伝わせていただきますが：駄目でしょうか？」

「夏砦」は周囲の者の顔を見回し「紅」の外套から覗く刀に目を落とした。

それは使い古して傷だらけで何処にでもある雑兵用の刀のような柄ごしらえをしたものだった。そんな「夏砦」の視線に気づき「紅」がそつとその柄に触りながら「夏砦」の顔を見据えて口を開いた。

「：皆さんが私をまだ信用していないように私も皆さんをまだ信用していません。」

ですからこれを手放す事をこの集落の中で私はしません。ですが

——」

そういうと「紅」はおもむろに外套の中で脇腹の辺りを探り縄紐を取り出し自分の刀の柄と鞘の繋ぎ目の辺りをそれでぐるぐると縛り付けた。そして鞘ごと腰から刀を抜き両手で地面に水平になるよう目の高さまで持ち上げ——

「ここで私は身の危険を感じない限りこの刀を抜かない事を約束します。」

そういつて「紅」は両の手を外に向けて思いきり引っ張った。

柄と鞘を縛りつけられたその刀はわずかにその隙間を見せたが刀身が覗く程に抜ける事はなかった。

その体勢のまましばらく「夏砦」と「紅」は見つめ合った。

周囲の男子達もそんな二人の様子を窺っている。

「いいじゃないか。休ませてあげようよ。」「夏砦」。

まず発言したのは妾集落の中でも古株の妾「吉」^{きち}だった。

「そうだよ「夏砦」。何か悪さが目的ならこんなやり取りわざわざする前にもう何かしてるよ。面倒じゃないか。」

「そうそう。見た所変な人でもないし……。」

「それにさっきの話の続きも聞きたいしさあ。」

「そうそう!」

「聞きたいわア!」

「吉」の声を合図に女達の言葉と笑いが飛び交った。一瞬にしてその場の空気がなごみ殺氣立っていた男子達もそんな女達をみて少し表情をやわらげた。

そんな皆の様子を一通り眺めた「夏砦」は一つ溜息をつき「紅」に向けていた刀をおろし「紅」に向けて言った。

「……いいだろう。ここで旅の疲れを癒やすがいい。」

ただしその間この集落の女達に交じって仕事をする事、決して一人で行動しない事、そして男子と話す際は必ず女子の目の届く所でする事を約束してもらう。

ここは閉鎖された妾集落。男子にとってお夕さんは――

「目の毒でしょうね……。それは重々承知してます。」

「……ではこの約束を守らずに身を守る為に刀を振るった場合には容赦なく斬らせてもらう。それでもいいか?」

「それはもちろん。あなた方の信頼に応えなかった私が悪いんです

からね…。」

「紅」の口元がふっと微笑む。そんな「紅」を見て「夏砦」の顔にもやっと微笑みが浮かんだ。それを見た他の男子達もやっと普通の笑顔を浮かべる。場の空気が完全にいつものなごやかな妾集落のものとなった。

「誰か里に先触れに行つて来い！」

客人が一人行くから宴の準備をするようにな！」

「はあい！兄さま！」

若い妾集落の娘達が飛び跳ねるように里に向けて駆けていく。それを合図に「紅」の周りに集落の女や男がどやどやと押しかけあれこれ質問をし始めた。

「お夕さん…：独り身かい？」

「なあ…：宴の席良かったら俺の隣に…。」

「ちよつとあんた達！「夏砦」の話聞いてなかったのかい！
気安く近づくんじやないよ！」

「そうよそうよ！男はまずあたし等を通してでないとお夕さんと話すの禁止！」

「なっ！なんだそれっ！」

「ずりーぞ！」

「何がずるいもんかね。」

ああ…：やだやだすつかり色気づいちまって皆昔はかわいかったのに…。

ねえ…：お夕さん、こいつ今じゃこんな生意気だけど昔はそりや泣き虫で——」

「おいっ！余計な事いうなよ！」

「あんたが余計な事口走ってるからだろ？」

「違う。」

「あははははは！」

「紅」は集落の者達に囲まれながら里へと向って歩いて行く。

「紅」が堯湖の方を一瞬ちらりと見たがまた集落の者達と会話をしながら歩いて行った。

「堯湖！大丈夫ですか？怪我は……。」

「堯湖兄さまあ！」

「大丈夫かい？堯湖。」

堯湖から離れていた「緋砂」と他の異母姉妹が堯湖の傍に駆け寄ってきた。

「はい……。大丈夫です。」

堯湖はそれだけいうと刀を鞘に納め心配している彼女達に向かってにっこりと微笑んだ。

「戻りましょう……里へ。」

そういつて堯湖は彼女達の背中を押して里を目指した。

四

——外へ……集落の外へ……行きたい。

堯湖は「ばいえいしやうこう 靈翳猩紅」の「むすめ 皇女」、「紅」に出会ってから強くそう思うようになっていた。

「紅」の様々な世界の話は外へ出られない妾集落の者達を魅了した。それは勿論堯湖もだった。

「紅」の語る話は堯湖がこれまで考えた事もないような突飛なものが多く世界の広さを改めて感じさせられた。

そんな世界を自分の目で見れたらどんなに面白いだろうかと堯湖は

強く思った。

また皇女でありながら何でも出来る「紅」に強く惹かれ惚れた。
集落の仕事を手伝うという「夏砦^{かさい}」の提案に堯湖は内心「紅」が家事や農作業を出来るのか、そこからぼろが出はしないかとひやひやしていたが堯湖の心配をよそに「紅」は普通によく働いた。

集落の女達に交じり籠を背負い鎌で稲を刈り、里では洗濯や煮炊きも慣れた手つきで女達と歌を歌いながらこなしていた。

僕は父様の「恥」…。父様の道具にすらなれない…。けれど僕には他の男子達と違って己で生きる術も知識も身に付けている…。だから僕はそれでいい。

「紅」に会うまで堯湖は確かにそう思っていた。今の自分に満足していた。

……けれど。

父様「霾翳猩紅」に「皇女」と認められその名の一字をもらう「紅」。

女でありながら己の刀を持って生まれ、おそらく「霾翳猩紅」の子の中でも一、二を争う実力者。

一族の中で尊い身分にありながら世情に通じ己で生きる術もきちんと身に付けている美しき人。

堯湖の欲しい全てを持つ「紅」という存在を知り堯湖は今の自分に満足出来ない自分が心の中にいる事を無視出来なくなっていた。

————僕も……外へ出られたら……。

「出ようと思えば出られるぞ…お前も。」

「紅」がそう言ったのは集落の女達に交じって堯湖と共に稲刈りをしている時の事だった。

「……本当ですか？でもどうやって？」

堯湖の顔が華やいだ。「紅」はそんな堯湖の顔を見つめて静かな口調で、けれど確かに言い切った。

「お前の刀に血を吸わせろ。お前と同じ血の流れる者の血をな…。」
「え…。」

赤銅色の長草がさわさわと揺れる。

「私達一族の刀は一族の血を吸えば吸う程に強くなる…。
刀を強くすれば同じ血の流れる結界ならば簡単に切り裂き道を開く
事が出来るようになる。」

私はここに入るのに刀を使った。
そう言って「紅」はそっと己の刀の柄に触れた。

「では…他の集落に入った話というのは…。」

「ああ、その話は全て本当だ。」

「でも…どうやって…？」

「それは話した通り血を止めた。私にはそれが出来るからな…。」
「…そ、そうですか…。」

「努力すればお前も出来るぞ。」

私達一族は流れる血を操る一族だからな…。」

「……は、はあ。」

堯湖は「紅」の言葉に曖昧に返事を返し稲に鎌を立てた。が、そこ
ではたとある事に気づき「紅」にそっと尋ねた。

「ねえさま…。」

「何だ？」

「ねえさまは…その…一族の血を吸ったのですか？…その母親以外

の血を…。」

堯湖がおずおずと尋ねた。そしてその言葉の意味に深く気づき堯湖はぞっとした。

「……そうだ…それならねえさまがここに来た目的の説明が上手く出来る。」

事をすぐ起こさなかったのもこの集落の状況を把握するためで…。

いくら妾集落の男子といってもこれだけいればそれなりの…。

冷や汗をかき一人物思いにふけり出した堯湖の額を「紅」が人差し指でつんとつつついた。

「っ…あ。」

「わかりやすいな堯湖は…。」

だがそんな下卑た真似、私はしないよ。「ばい霾」や…「しょう猩」にいやじゃあるまいし…。」

「猩」にいや…。その名を口にした時「紅」の瞳が深く沈んだ。影を見せる「紅」を見るのは初めてだったので堯湖はその名の者達がどういった者達なのか聞くのをためらった。

そんな堯湖の心の揺れに気づいたのだろう…。

「紅」は稲を刈りながら自ら堯湖に語り始めた。

「父様には父様が己の子と認めた子が四人いる。」

そして皆それぞれ父様からその名の一文字を賜っている。私のようにな…。」

ざくつと音を立てて刈り取られた稲穂の束が「紅」の背負う籠の中へと投げ込まれた。

「私達はこの四人で兄妹と呼び合っている。

長兄の名は「ばい霾」。父様とその妹君「こうが絳河」様との子で一族の血が深い為か非常に気性が荒く残忍な男だ。一族の者を手にかけてはその者の血を吸いとり己の力としている。はつきり言って私の嫌いな男だ。

次兄の名は「かけ翳」。母君は特にこれといった血筋の出の方ではなかったが父様の子の中で唯一二刀の刀を持って生まれてきた人だ。

「霾」と同等、もしかしたらそれ以上の力を持ちながらもその名のごとく御殿の奥でいるのかいないのかわからない位ひっそりと影のように暮らしている。

はつきり言って「翳」に兄様の事はよくわからない。

そして三兄の名は「しょう猩」。父様最愛の妃にして「西の首」の歌姫「せんわがぼう惨琶雅望」の愛娘「そうそうしゅ奏想珠」様との子で、温和で知的な誰からも好かれる方だった。

だが随分前に：一族の者を手にかけそのまま姿をくらましてしまっている。

はつきり言って私が本当に兄と慕ったのはこのに様だけだった。」
二人の間を風が吹き抜け草原がさざ波を立てる。

聞いてはいけない気がする…。でも聞いてほしいと言っている気もする…。

堯湖は少し悩んだ後「紅」に訊いてみる事にした。

「どうして…：「猩」という兄様は一族の者を手にかけたのでしょうか…。

温和な方だったのでしょうか？」

堯湖は刈り取った稲穂を自分の籠の中へと放り込んだ。

「紅」は何も言わず己の掴む稲穂に鎌を入れている。

一束掴み、鎌を入れ、刈り取り、己の籠へ…。黙々とその作業を繰り返している。

——やはり立ち入り過ぎでしたか…。

「…ごめんなさい。」

堯湖はそれだけ言うとうちも稲穂刈りに専念した。

「堯湖オ〜。お夕さあ〜ん。そろそろ戻りましょ〜。」

「あ！はあ〜い！今行きま〜す。」

堯湖はすつと立ち上がりその呼び声に答えた。

「さっ…ねえさまも…早く。」

「ん…。」

「紅」も今手にかけていた束を刈り取ると立ち上がりその呼び声を発した集落の女に手を振った。

「堯湖…。」

「はい？」

「紅」は手を振りながら堯湖の名を呼んだ。

「「猩」に様は…父様の血を吸って姿をくらましたんだ。」

「…えっ…それでは父様は…。」

「父様…」「霧翳猩紅」はすでに亡くなっている…。」

「っ…そんな…。」

「だが殺したのはお前だ…堯湖。」

「は…？」

堯湖が驚いているのもそのままにして「紅」は女達のもとへと駆けて行った。

——僕が…父様を…殺した？

「紅」の言葉が頭の中で耳鳴りのように響き渡る。

遠くで集落の女達の呼び声が聞こえる。

堯湖は集落の女がその手を引きに来るまで我に帰る事が出来なかった。

【裏置き】 血刃の妾集落（下）（前書き）

はい、後篇です。

つじつまやっぱり変です。

にゅアンスで読んでいただければ幸いです。

銃

【裏置き】 血刃の妾集落（下）

五

——そんなの…そんなの嘘です。

僕が…僕が父様を殺したなんて…。

——だって僕は父様の顔すら覚えていません。

そんな幼い時に「西の腕」の剣帝といわれた父様を殺せる訳がありません…。

——何より僕の刀がそれを証明しています…。

父様を殺しているのなら僕の刀は紅蓮に染まっているはずではないですか。

——きつとねえさまが嘘をついているに違いありません。

きつとねえさまが嘘を…。

——では…何の為にねえさまはそんな嘘を？

ねえさまが僕にそんな嘘をついてまでして何か得るものがあるのでしょうか？

——……………。

——僕が父様を殺した…仮にこれが本当だったとしてどうしてそこに「猩^{しょう}」に様と

いう人が出てくるのでしょうか？

そして何故父様を殺した僕でなくその人だけが父様の血を吸っているのでしょうか？

……………。

———そもそも：父様がすでに亡くなっているという事自体本当の事なのでしょうか？

「珍しいな…「白子」^{しらす}」。

てめえが一人でうろついてるなんてよオ。」

堯湖^{たかこ}が夕闇迫る里の外れの墓場近くで一人物思いにふけっていると集落の男子の一人「丹霄子」^{たんしょうじ}が堯湖に声をかけてきた。

「丹霄子」は一番の古株の男子だった。

気性が荒く性根の悪い男子で集落の男子達から疎まれている存在だった。

「丹霄子」と同年代の男子は皆とつくの昔に外へ連れていかれていた。

この事からもわかるように「丹霄子」はそこまで剣の才がある訳でもなかった。

けれど一方で次の御殿の使者が訪れた時には必ず外へ連れて行かれるだろうとひそかに言われていた。

普通はその才をもって出ていくものだが閉鎖的な集落に「丹霄子」のような存在は危険だからだ。

故にそういった男子がある時使者に「お願い」すると連れて行ってくれるという。「丹霄子」は次回のその「お願い」候補に挙げられていた。

「っ……！」

「おい…待てよ…逃げんじゃねえよ。」

とっさに逃げようとする堯湖の腕を「丹霄子」が思いっきり掴んだ。

「ッ……。」

「なに…ちよつとてめえにお願いがあるんだよ。」

この俺様がてめえみたいな雑魚にだぜ…。

嬉しいだろ？」

「丹霄子」は思い切り掴んだ堯湖の腕を堯湖の背中の上にひねり上げた。

「うッ……。」

堯湖の顔が苦痛にゆがむ。その横顔を見て「丹霄子」はにたりと笑い堯湖の背後からそっと耳元に口を近づけいやらしく囁いた。

「なあ…あのお夕とかいう女。良い女だよなア…。」

やりてえんだよ…だからよオ…あの女俺の所に呼び出してきてくれよ……。

……な、いいだろお？もちろんお前にも良い思いはさせてやるからよ……なんだかんだもう女には興味あるんだろ？お互いいつ外に出れるかわかんねえんだしよオ…な？

一人旅の女だからそれなりに腕はあるんだろうが……なあに俺ら男二人がかりなら何とかなるって…。」

堯湖は自分の耳が熱くなるのを感じた。

とっさに背後から堯湖の腕をひねり上げる「丹霄子」の足の甲を思い切り踏みつけていた。

「……ッテ！」

「丹霄子」が足の痛みに一瞬ひるみ堯湖の腕をひねり上げていた手の力を緩める。

堯湖はその隙を逃さずひらりと「丹霄子」の腕から逃れるとその流れを利用したまま「丹霄子」のそのこめかみに拳を食らわせた。

「……………っ。」

「丹霄子」は墓場の生垣に突っ込みそのまま白目をむいて崩れ落ちた。

「おっ……。」

堯湖の両目から涙がこぼれた。

「お前なんかと一緒にするなァッ！」

堯湖はそれだけ叫ぶと里の中の自分の家へと向けて駆けて行った。

「丹霄子」に二人がかりで無理矢理女を抱く事しか出来ない、そしてそうしたいと思っっている男と見られた事に非常に腹が立った。

堯湖は情けなさで悔しさと惨めさと恥ずかしさでとめどなく流れ出る涙を止める事が出来なかった。こんなに今ある自分を嫌だと感じた事はなかった。

——悔しいっ…悔しいっ……悔しいっ！

堯湖は里の中を駆け抜けた。女達は夕餉の準備に家にはいない。ほとんどの男子達も夕餉にありつこうと早々と里の広場に移動していた。それでもまだ家の軒先で腰を下ろす幾人かの男子が堯湖を見とがめ呼びかけた。けれど堯湖はその声を無視してそのままに駆け抜けた。

——僕が父様を殺したなんて絶対嘘だッ！そんなの嘘だッ！
だってそんなに強いなら僕はこんな所にいないっ！

僕はこんな所でこんな悔しい思いなんかしたりしてないっ！

こんなっ……こんな思いなんかっ…。

堯湖は自分の家の中へ駆け込んだ。中では堯湖の実母「しゅんこ儁湖」が沢山の壺や壺に囲まれて薬草を煎じている所だった。堯湖の実母「しゅんこ儁湖」はその知識をもって妾集落で医者のような事をして暮らしていた。

「お帰りなさい堯湖。」

全くどうしたというのです？そんなに急いで——」

「しゅんこ儁湖」は顔を上げ今だ涙を止めどなく流す悲しげな堯湖の顔を見て次の言葉を失った。

「…堯湖……。」

「母さま……父さまは…」ばいえいしやうこう「ばいえいしやうこう羆翳猩紅」はすでに亡くなっているというのとは本当なのでしょうか？」

「ッ！」

突然の質問に「しゅんこ儁湖」は絶句し取り繕う事なく固まった。

——ああ…それは本当なんですわ…。

堯湖はすぐさま家の外へと飛び出し駆け出した。

「堯湖っ！」

「しゅんこ儁湖」が壺や壺が倒れるのも構わず、飛び出していった堯湖の後を追いかけた。

「堯湖！待って…待ちなさい！」

堯湖の耳に「しゅんこ儁湖」の声が痛く響く。それでも堯湖は止まらない。

「しゅんこ儁湖」は途中で力尽き膝に手をつき肩で息して立ち止った。

「そのまま走って……どこへ行けるというのですかッ？」

——どこへ……？

堯湖はぴたりと立ち止った。

そして遠くで自分を見ている母親に向かってゆっくりと振り返った。

——そう：ですね……僕は……ここからどこへも行けない……。

そう感じた途端、堯湖はまた一筋の涙を流していた。

「こちらへいらっしやい……堯湖。」

「偽湖」が先程出した大声とは違った優しい響きで堯湖を呼んだ。

そう……堯湖がいつも耳にする、厳しくけれどそれ以上に優しい母の声で……。

堯湖は大人しく母親の元まで引き返した。そんな堯湖を「偽湖」は優しく抱きしめた。

「堯湖……。」

「偽湖」の声が堯湖の耳に優しく響く。先程屈辱を注ぎこまれた耳に優しさが流れ込んでくる。堯湖は母の腕の中で先程とは全く違う熱い涙をこぼしていた。

「僕が……僕が父様を……？」

「いいえ……それは違います。きっと違うのですよ堯湖。」

あなたは悪くありません。あなたは何もしていませんから……。

「

「母様……。」

「あなたの刀が何よりの証……。その白さが何よりの潔白の証。」

「母様……。」

「それにしても一体誰が貴方にそんな事を……。」「

「……………」

母の腕の中で堯湖は身を固くした。そんな堯湖の肩をつかむと「僞湖」は己の腕から堯湖の顔を引きはがしその顔を覗き込んだ。

「いいでしょう…堯湖。貴方ももう何もわからない子供という訳でもありません。」

私の知っている事を全て貴方にお話しします。よろしいですね？」

堯湖の母、「僞湖」はいつもそうするように堯湖の瞳を見ながら堯湖の言葉を待った。

堯湖は母のこの聞き方が苦手だった。堯湖はよく考えて込んでしまふ癖があった。その為目をさ迷わせて答える事が多々あった。その度に母から人に心の隙を見せてはなりませんとたしなめられていた。

「はい…教えてください母様。僕は僕の事を知りたい…。」

不安でどうにかなりそうになりながらもその時の堯湖はきっぱりと母の眼をまっすぐに見て母の言葉に答えていた。

六

「貴方が父様にお目見えしたのは貴方が生まれてすぐの事…。
その一度きりの事でした。」

「僞湖^{しゅんこ}」は堯湖^{たかこ}を連れて家に戻ると堯湖に話をし始めた。

「父様は一言仰りました。」

「これが本当に俺の子か？」と……。そして御殿の中でも一番境界の土地に家を賜り私達はそこで暮らす事となったのです。」

——これが本当に俺の子か？

初めて聞く、そして最初で最後の言葉になるであろう父様から贈られた言葉…。

堯湖はきつく唇をかみしめた。

「それから数年後、ちょうど貴方の刀が脇差程に成長した頃、父様からの使いが参りました。その者は父様からの命により貴方の刀を取りに参ったのです。」

「僕の刀を？どうして…。」

「ほんの戯れだったのでしょう…。純白の刀にどんな力があるのかあの方はきつと試してみたかったのですよ、堯湖。」

「どんな力って…。」

——力なんて…何も…。

「それから一夜明けるとまた使いの者が刀を返しに参りました。けれどその使いの者は父様、「霾翳猩紅」様の使いの者ではなく貴方の兄様のお一人で「霾翳猩紅」様から実子として認められていらっしゃる「霾^{ばい}」様の使いの者でした。

しかもその使いの者は多勢の護兵を引き連れてまいりました。彼らはすぐさま私達を捕えると牛車に乗せこの妾集落まで連れてきたのです。

使いの者は言いました。「以後お前達はここで暮らす事。またその間その子供は女子のように農作業をし、男子のように刀を振る鍛錬を積む事を禁ずる。」と…。

突然の事に納得がいきませんでした。私は使いの者を詰問しました。何故「霾」様の使いの者にそう言われるのか？「霾翳猩紅」様はどうしたのか？と…。

けれど使いの者は何も答えてはくれませんでした。
そして私達をこの集落の中へ閉じ込めたのです……。」

「儼湖」の瞳が鈍く光った。

知識をつけた堯湖が外の世界に興味を持つように「儼湖」もまた外の世界で生き知識を高めたかったのだろう。外の世界で生きその広さを知っている「儼湖」ならなおさら……。幼い頃から堯湖はいつも何とはなしにこの母の悔しさを感じていた。

「……しばらくしてからです。私が御殿で何が起きたのかを知ったのは……。」

後からここに送られてきた一族の方が教えて下さいました。

貴方の父君「霾翳猩紅」様は「霾」様同様「霾翳猩紅」様から実子と認められていた「猩しやう」という方に殺されたのだと……。

その日「霾翳猩紅」様はその「猩」という方と手合わせをしたのだそうです。

そう……「霾翳猩紅」様は貴方の刀をお使いになって。

そこに立ち会っていた者は誰もいなかったのでもってどうしてそのようになったのかは誰も知りません。けれどしばらくしてその鍛錬場に人が入った時には「猩」という方の姿はなく「霾翳猩紅」様唯お一人が事切れて仰向けに倒れていたのだそうです。

その胸元には一突き深い刺し傷、そして傍には貴方の純白の刀を投げ出した状態で……。」

——「猩」にいは様は……父様の血を吸って姿をくらましたんだ。

——だが殺したのはお前だ……堯湖。

——姉さまの言った事の意味がわかったような気がする。
父様にとってほんの戯れだった手合わせ。

刀に一族の血を吸わせる事で強くなれる血族。

父様は僕の刀で手合わせをしたからおそらくその「猩」というに様の前で隙を突かれてしまったんだ。

「猩」というにい様がその時何を考えていたのかは僕にはわからないけれど僕の刀がそのにい様の心に魔を差してしまったんだ。そうです…やはり僕が…。

ぱんっという音と両頬に走る痛み堯湖は物思いから我に返った。痛みの後に温かさが頬に広がる。それは「偽湖」の手だった。

「母様…。」

「言っただでしょう？ 貴方は悪くないと…。

悪いのは戯れや魔に憑かれたその者達の心の有様です。

仮に貴方の存在に罪があるとしてもしょう…。ですがその場合でもまず罪があるのは貴方を生じた「霾翳猩紅」様と私。「霾翳猩紅」様などご自分で撒かれた種の実でなのですから自業自得というものです。わかりますね？」

堯湖は母の眼に向かってゆっくりと頷いた。それを見て「偽湖」は堯湖の頬から手を離す。

「堯湖…公には知らされておりませんが「霾翳猩紅」様の一族は同族の血を刀に吸わせる事でその者の力を己のものとする事が出来るのです。

「霾翳猩紅」様がご健在の頃はその事実を隠され、また知る者に対してはその行いを禁じてきました。そして皆がそれに従いました。何故なら「霾翳猩紅」様の力に及ぶ一族の者は一人足りともいなかったからです…。

けれど「猩」という方はその「霾翳猩紅」様の力を己の力としてしまった…。」

——私達一族の刀は一族の血を吸えば吸う程に強くなる…。

「紅」の言葉が堯湖の脳裏をよぎる。

「…「霾翳猩紅」様がお亡くなりになられた事を知った「霾翳猩紅」様の実子が一人、現在一族の長についている「霾」様は本殿に住む兄弟姉妹を次々に斬りつけては己の力にしようと思いました。誰もその行いを止める事が出来る者がいなかったのです。そしてその為にほとんどの本殿暮らしの者はいなくなったそうです。」

「どうして…：僕達は殺されなかったのでしょうか…：。まず真っ先に殺されていそうなのに…：。」

堯湖は思わず呟いていた。

兄弟姉妹を問答無用で斬りつけ自分の力にしようとするそんな気性の激しい人物が母様のように堯湖は全然悪くないなどと考えerとは到底思えない。父様「霾翳猩紅」の力を「猩」に様に奪わせる契機を作った一番の原因と考えているに違いない。それなのに…。

「それは貴方の刀が純白だったからです…。もし血に染まっていたとしたらおそらくすぐに殺されていた事でしょう。」

堯湖はその答えに納得がいかなかった。

純白だから罪が無い。そんな考え方をする人間とは思えなかった。

「わかりませんか？堯湖。」

不満そうな顔をしている堯湖に向かって「儁湖」は言った。堯湖は首を縦に振った。

「普通あり得ない事なのですよ。そんな事は…。

いくらご自分の刀でないとはいえ「霾翳猩紅」様がご自分の子に一太刀も浴びせられずに絶命するなんて…。

ですから「霾」様は貴方を持て余しているのです。貴方を見くび

る一方で同じ位貴方を恐れているのです。」

「僕を……恐れているって。」

「貴方に関わる事でご自分の命が奪われる事を……」

「っ……そんな……そんな事僕に……。」

「……誰も「霾翳猩紅」様の最期を知りません。ですからそのような事が貴方に出来ないと言い切る事も誰にも出来ません。

ですから貴方と私は妾集落に閉じ込められた。そして貴方はその刀を使う事を禁じられたのです。」

——そんな……そんな事って……。

そこで「偶湖」は口をつぐみ家の戸に目をやった。堯湖もそちらを振り返り耳を澄ませる。

しばらくすると遠くからぱたと歩いてくる音が近づいてきた。そして家の戸に隙間があくとそこにぬっと足が差し込まれその足がゆっくりと戸を押し開いた。

「「偶^{しゅん}」義母^{かあ}さま。今日の夕餉です。今日はですね、お漬物に芋粥、それと蛙^{あし}使の汁物です……て、あれ堯湖？何であなたここにつて……あらあらあ？」

足で戸をあけて堯湖の家の中に入ってきたのは、菓の調合に忙しい「偶湖」の為に夕餉を持ってきた堯湖の義母姉の一人「莠^{ゆしま}寫」だった。

「いやあゝん、堯湖ったら。鼻真っ赤っ赤あゝの目えぐずぐずうゝ。すっごく久しぶりじゃない泣き顔なんてえゝ。えゝやだやだどうしたのお？」

おねえちゃんに相談してみなさい？」

そういうやいなや「莠寫」は眼を爛爛とさせて草鞋を脱ぎ棄て家に取り込んだ。

とっさに堯湖はそっぽを向いたが「莠寫」はお膳を置くと問答無用

で反対側からじろじろと覗きこむ。

「なっ…何でもないです、本当に何でもないですから…姉さま。」
堯湖が慌てて己の顔に右手の甲を当てて顔を隠しながら答えた。

「嘘よ嘘。最近じゃ男子にいじめられても全然泣かない堯湖がそんな顔になるまで泣くなんて絶対何かあったに決まってるじゃない！おねえちゃんの目は節穴じゃないんだから。」

弁解する堯湖の右手を顔からひっぺがそうとその手首を掴んで引っ張りながら「莠寫」が反論する。

——よりによって今日の夕餉の当番が「莠寫」姉さまだったなんて……。

堯湖は必死に抵抗しながら今日の己の運の悪さを呪った。

堯湖の義母姉の一人「莠寫」は妾集落の中でも一番のおしゃべりだったからだ。

きっと明日の朝には集落中に泣いた事が知れ渡ってしまうにちがいない。

堯湖はまた別の意味で泣き出したくなった。

「そうですか…。今日は「莠寫」でしたか…。」

堯湖ははっとして母の顔を見た。

——母様…！どうか姉さまに口止めを…！

しかし次に「儁湖」の発した言葉は堯湖の祈りと予想を完璧に裏切るものだった。

「ちょうど良い所にいらっしやいましたね。」

「どこがアッ！」

思わず堯湖は叫んでいた。そんな堯湖の顔に「僞湖」の水の眼差しがすかさず突き刺さる。

「――で…しょうか…？」

「そう…：言葉は綺麗に使いなさい、堯湖。」

「僞湖」は穏やかに堯湖に言った。

「何ですか？」「僞」義母さま。私がちょうど良い所に来たというのは…。」

「母様…。」

「今堯湖にお話ししていた所だったのですよ。」「霾翳猩紅」様がお亡くなりになられた時の事を…。」

「母様ッ…！」

「大丈夫ですよ堯湖。」「莠寫」はその事を知っています。そして私が知らなかった事を教えて下さったのは「莠寫」なのです。」

「姉さまが…？」

堯湖はもう顔を隠すのも忘れて「莠寫」の顔をまじまじと見つめた。
「なる程…：そういう事でしたか。」「僞」義母さま。だから堯湖は泣きはらして…。」

わかりました。そういう事でしたら堯湖が泣いてた事とか誰にも話したりしませんから。」

「莠寫」はとんと自分の胸を拳で叩いた。

堯湖はこの集落一のおしゃべり姉さまが誰にも口外しないと誓った事に大層驚いた。

「じゃあ堯湖。堯湖の分も夕餉持ってきてあげるわね。

そんな顔じゃ広場に行けないでしょ？大丈夫！皆には「僞」義母さまの調合のお手伝いで手が離せないからとか言ってくるから。」

そういうと「莠寫」はたっと立ち上がると草鞋を履き戸に手をかけた。

「……有難うございます。姉さま。」

「かわいい弟の為ですもの！」

「莠鳶」はにこっと笑うと戸を開けてまたぱたと広場に向けて駆けて行った。

「堯湖……。」

「僞湖」が少し改まった様子で堯湖の名を呼んだ。

堯湖はそんな母の顔を見つめる。

「もう一度聞きます。」

「……誰が……あなたにそのような事を言ったのです？」

堯湖は体をびくりと震わせた。そんな堯湖を見つめながら「僞湖」は話の先を続ける。

「……：「霾翳猩紅」様がお亡くなりだという事、それに加えて貴方がそこに深く係わるという事まで知っている者はこの妾集落に数える程しかおりません。」

そしてその事を貴方に突然告げるような者の顔を私は思い浮かべる事が出来ません。」

「……：……：そ、それは。」

「誰なのです？ 堯湖。」

「……：……。」

「堯湖？」

「……：……それは。」

堯湖が「僞湖」に問い詰められて言葉に詰まっていると、遠くからまたぱたと誰かが近づいてくる音が聞こえてきた。

地面を蹴りつけるような、それは何か鬼気迫るものを感じさせる足音だった。

胸騒ぎがした。それは予感だった。その音はこの家を目指している……。

思わず堯湖と「偶湖」が家の戸に目をやると、その戸が勢いよく開き先程軽やかに駆けて行った「莠寫」が青ざめた顔をして飛び込んできた。

「……どうしよう…。」

「莠寫」はそれだけ言うとそのまま草鞋も脱がずに堯湖の胸に飛び込みその体をきつく抱きしめた。

七

「……姉さま…?」

「どうしたのです?」「莠寫ゆしま」。

「莠寫」の放つ緊迫した空気に堯湖たかこと「偶湖しゅんこ」の顔も強張る。

「……殺されて…死んじゃった…。」

堯湖の胸に顔を埋めながら呻くように「莠寫」が言った。とても聞き取りづらかったけれどその言葉は堯湖の心に深く響いた。

「……………え…。」

「誰が……誰に殺されたというのです?」

「「丹霄子たんしょうじ」……「丹霄子」が皆殺してた。」

そこで「莠寫」が堯湖の胸から顔を上げた。その瞳は深く涙を溜めていた。けれど「莠寫」はそれが流れるのを必死に堪えていた。今はまだ涙を、感情を溢れさせてはいけない、冷静にならなければいけないと必死に堪えていた。

「皆って……具体的には誰をです？」

「偽湖」が青ざめながらも毅然として「莠寫」に尋ねる。

「広場にいた男子はほとんど……今も殺してる……。どんどん男子だけを殺していつてるの……。女の人は皆逃げまどってる。

でも皆殺すって叫んでたから……。男子が終わったら女子も……。私達、ここから出られないし……。っ……。」

そこで「莠寫」は口元を手で押さえ声を出さずに涙をこぼした。

そんな「莠寫」を堯湖がしっかりと抱きしめる。

「そんな……。『丹霄子』が……。あの子は血の事を知らないはず……。いいえ、それ以前に『丹霄子』の腕でそんな事が出来るはずが……。っ。」

「……姉さまだ……。っ。」

堯湖はぽつりと呟いていた。

「え……。っ？」

「……姉さま？」

堯湖の言葉に「莠寫」は顔を上げ「偽湖」も堯湖の顔をまじまじと見つめた。

「……そうです……。そんな事が出来るのは姉さましかいない……。」

そうだ……姉さまがやったんだ……。」

堯湖は熱に浮かされたような顔をして宙を見つめたまま呟いた。

「姉さま？ 姉さまって……。無理よ、この集落の女子で男子になう子なんている訳ないじゃない……。男子は皆刀を持ってるのよ……。っ……ッ！」

「……ッ……。堯湖……まさか……。っ。」

「……。っ……お夕さん？。」

「莠寫」と「偶湖」の声が重なった。そして重なる声が二人にその事を確信させた。

「……………どういう事なの？ 堯湖…貴方何を知っているの？」

「偶湖」の声がかすかに震えた。堯湖は母の顔にゆっくりと顔を向ける。

「お夕さんは……本当は僕達一族の一人なんです。

本当の名前は「紅」^{べに}。女子であるにもかかわらず己の刀を持って生まれた、父様「^{ばいはいしやうこう}霾翳猩紅」の皇女^{むすめ}なんです。」

「娘ですって……？」

「「べに」ってまさか……父様の一字？」

「そうです。父様に認められた子の一人なんです。」

「つ……嘘でしょ……。」

「皇女様が……どうして……。」

「偶湖」ははっとして堯湖を見つめた。

「堯湖…まさか貴方に父様の事を教えたのは……。」

「姉さまです。」

「なんて事……………」

「偶湖」は完全に絶句して堯湖を見つめたまま固まった。

自分の腕の中で涙を流して打ち震える「莠寫」、いつも気丈に自分を諭してくれるはずの母のそれまで見た事のない途方に暮れた顔…。

——こんな顔二人にさせちゃいけない……させたくない……。

堯湖は一度また「莠寫」をきつく抱きしめると己の体から「莠寫」の体を引き離して立ち上がった。そしてそのまま草鞋も履かずに土間に降り家の戸口へと向かって歩み始めた。

「……母様…「莠寫」姉さまを頼みます。」

堯湖は戸口に手を掛けぴたりと止まると一言言った。

「っ……いけませんっ！ 堯湖！ 行っては駄目ッ……！」

「偽湖」は堯湖がこれからどこへ何をしに行くのか察して堯湖に向かって声を上げた。そして堯湖と同じく裸足のまま土間に降り立ち堯湖の腕をつかんだ。

「……姉さまの目的はおそらく僕です。

そして姉さまが僕にさせたい事は……たぶん僕や母様が今考えている事で間違いないはずです。

その後の事やどうしてそうさせたいのか……そういった事は全くわかりませんけれど……。」

堯湖は戸口に掛けた手を離しその手をそのまま自分の腕を掴む母の手に重ねた。

「……駄目……駄目よ……堯湖……殺されてしまうッ……。」

母の声が耳を打つ。堯湖は母が泣いているのを背中で感じた。

「このままでは必ず皆殺されてしまいます。

けれど……僕が死ねばそこで全てが終わるかもしれません……。」

「……っそんな事言わないでッ……。」

「今まで……僕を育てて下さって有難うございました……。」

「やめなさいッ！ 堯湖！」

「堯湖ッ！」

「偽湖」と「莠鳶」が叫んだのを合図にするように堯湖はそこで母の手を振り払うと勢いよく戸を開けて広場へ向けて駆けて行った。

———どうして……これだけ多くの人間が刺されて死んでいるのに——。

堯湖^{たかこ}は皆の集まる広場に駆けつけた。そこには夕餉がこぼれ散乱した器と一緒に沢山の男子の亡骸が転がっていた。
けれど……。

———血の匂いが殆どしない……。

堯湖は近くの亡骸に手を伸ばしその体の傷口に触れた。
心の臓を一突き。けれどその突き傷のみに朱を見せるだけで血は一切流れていない。

堯湖は辺りの亡骸に目を転じ息を飲んだ。

一突き、一突き、一突き。目の届く限り全ての亡骸が体のどこかを一突きにされていた。

その傍らに必ず黒ずんだ刀身を転がして…。

そう……主が死んだように刀も死んでいた。

夜の闇に掲げられた広場のかがり火に照らされて、亡骸の影はゆらゆらと揺れ動いたが、そこに生きて動く人影は何処にも見当たらない。

「姉さまっ！姉さまっ！」

堯湖は声を張り上げて「紅」を呼んだ。けれどそこに「紅」の姿は見えなかった。

その気配を辿ろうとしても集落の中の何処にもその気配を感じ取る事が出来ない。

そこには「紅」どころかその他の気配も———

体が泡を吹くように総毛立った。その気を察した堯湖は瞬時に体をひねりそれを避けようとした。しかしそれを完全に避け切る事は出

来なかった。

堯湖の右肩に焼けるような痛みが走る。と同時にその痛みは堯湖の中へ侵入し、内側からざらついた舌で舐めつくすような感覚を堯湖に与えた。

ほんの一瞬だったがその感覚は堯湖の腕の力を完全に抜き取った。

———なッ……。

堯湖は戸惑いながらも腕の力を奪ったその間合いから逃れる為に後ろへ飛んだ。

「……さっきはよくもやってくれたじゃねえかあ。雑魚のくせによお……。」

「「丹霄子」……。」
たんしょうじ

堯湖は傷ついた右肩を押えながら目の前に立つ「丹霄子」を見てぞっとした。

充血した瞳の瞳孔は常に小刻みに震え、だらだらと滝のように汗を流し肩で息する姿はとても尋常なものではなかった。そしてその手に握られた刀の柄からは血がごぼごぼと溢れ刀身を廻る血にすでに一定の流れはなく大小様々の渦を描いていた。

「「丹霄子」だとお…?」

「丹霄子」が口の端から泡を飛ばしながら呟き堯湖の方へのそりと一歩踏み出した。

堯湖は右肩を庇いながらそっと右手で己の刀の柄を握りまた一歩後ろへと引いた。

「手前エが俺を呼び捨てにすんじゃねエヨおツツ……！」

堯湖が「丹霄子」の絶叫を耳にした直後、堯湖の体は後方へと吹っ飛んでいた。

堯湖の体は広場の中央にあるかがり火の傍まで飛び、兄弟の亡骸の上にどさりと落ちた。

「……………っ。」

自分の身に何が起こしたのか堯湖はすぐに理解出来なかった。

気付くと自分の両手は己の刀の柄と鞘をきつく握りしめ白々とした刀身を半ば覗かせた状態でいた。両の手が焼けつくように痛い。

「……はあゝ？ 雑魚のくせに止めやがったア……。」

少し離れた所で「丹霄子」が呟いている。

その呟きで堯湖は自分が我知らずに「丹霄子」の刃を受け、その力でそこまで吹っ飛ばされたのだという今の自分の状況を把握する事が出来た。

けれど――――

――――…刀で受けようと…僕は全く意識していなかった……。

堯湖は己の無意識の動きに驚いていた。思えば「紅」との初めての出会いでその刀を受けた時も、我知らず振り下ろした刀の軌道をずらし「紅」の刀を受けやすくしていた。

結果的にその行動に自分は救われた。けれどそれも自分の意思でした事ではなかった。

――――一体………。

「そうそう…びっくりしただろ？」

それ…全部この俺の刀でやったんだぜ……すげえだろ。」

「……………え。」

堯湖は自分の視線がある顔を捉えていた事にそこで気づいた。

「丹霄子」は堯湖がその顔に見入っていると思っただけらしい。

堯湖はその顔を認めた。次の瞬間自分の中の不安など一気にどこかへ消し飛んでいた。何故ならその顔は――

「「夏砦^{かさい}」兄様……………」

堯湖の眼の先には集落で一番の実力者であった「夏砦」の死顔が横たわっていた。

目を見開いたままのその顔には恐怖や苦痛の色は見受けられない。

そこには何の感情も浮かんでいない。

信じられない事だが何の自覚もないうちに殺されてしまった人の死顔だった…。

「…………「丹霄子」が…「夏砦」兄様を殺したのですか…………？」

「ん？…ああ、まあな。」

「丹霄子」がにたりと笑った。さも自分が称えられるべき偉業を成し遂げたとも言おうように……自慢げに、自信ありげに……。

「ッ！」

体の中を血が巡り頭の中が熱くなるのを堯湖は感じた。

とっさに体を動かそうとしたが柔らかい足場に体を取られ思わず片手をその場で付いていた。指先がまだ生暖かい起伏に触れる。見るとそれは兄弟の鼻先だった。

堯湖は自分が幾人かの兄弟の亡骸の上に己の足場を気づいている事

にそこで初めて気が付いた。

「ッ……！」

突如込み上げてきた不快感に耐えきれず、堯湖は亡骸から降りるとその場で嘔吐していた。

一度嘔出したそれは止まらない。

自分の体の中の全ての負の感情を取り除こうとするかのように、悲惨な現実を完全に拒絶しようとするかの様に堯湖はその場で何度も何度も嘔吐し続けた。

息もつけず、眼尻に涙を滲ませながら堯湖はただただ嘔吐する。

そんな堯湖の様子を満足そうに眺めながら「丹霄子」はゆっくりと堯湖に向かって歩き始めた。堯湖を目指して真っすぐに：己の兄弟の亡骸を平然と踏みつけながら近づいてきた。そして「夏砦」の亡骸の上に腰を下ろし堯湖の蹲る様をねっとりとした目付きで一しきり愛でた。

「……よく見せてみろよ。」

「丹霄子」ゆっくりと腰を上げると堯湖の髪をつかみ堯湖の顔を己に見えるよう無理矢理上げさせた。

「ひひ……俺好みの良い面構えになったじゃねえかア……」

「丹霄子」は堯湖の瞳いっぱい己の顔が映る位顔を近づけにたりと笑った。

「……………」

堯湖は虚ろな瞳で見つめ返した。その瞳から涙が流れる。掴まれた髪の毛を感じる事も出来なかった。感情が、感覚が全てが麻痺してしまっていた。

ただ疲れて……荒い息を繰り返しながら「丹霄子」のなすがままになっっていた。

「お前は俺と同じだからなア……お前だけは助けてやってもいいとも思っただぜ……？」

「ただだよオ——」

「——俺と……同じ……。」

堯湖の心にその音が落ちた。その響きは堯湖の心の中を波紋のように広がる。

髪を引かれる頭が痛い。次第に意識がはつきりとしてきた。

「あの「お夕」って女がよお…刀の力で結界を裂くかこの男を全員殺して男が一人になるかしないと出れないって言うんだよなア…これはそういう結界なんだって……。」

「——「お夕」……。」

堯湖の瞳に光が戻る。堯湖は「丹霄子」の顔を意志を持って見つめ返した。

「……で、今試してきたんだよ。この刀で結界が切れるかどうか……。」

そう言って「丹霄子」は己の刀をやや持ち上げ見つめた

「丹霄子」の刀は絶えず血を吐き出し続けている。身に余る命の多さに耐えかねそれを拒むかのように……。

「これが駄目だったんだよなあ……全く。そもそもここにいる奴等が弱すぎるんだよ……。」

だから悪いな…「白子^{しらす}」。お前でこの集落の男は最後。斬らせてもらうぜ……。」

「……う。」

「あ……？」

「違う…皆が弱いんじゃない…。お前が…お前が弱いからだ！」

堯湖は「丹霄子」を睨みつけて言い切った。

「……っの！」

「丹霄子」は眼を見開くと掴んでいた堯湖の頭をそのまま地面に投げつけた。

「……………ウ。」

「弱い？弱いだと？」

この馬鹿がツ……ほらっよく見ろツ！

皆死んでるだろがツ……俺がやったんだぞツ！

この俺がツ……皆ツ……皆だツ！お前にこれが出るかよツ！

あア？出来るのかよオツ？」

「……こんな事……したくもないっ！」

「……………なツ！」

「それに……「丹霄子」一人にこんな事が出来るはずがないツ！」

「……んだとオツ！」

「丹霄子」は怒りで体を小刻みに震わせながら地面に崩れ落ちていく堯湖を睨んだ。その手に握られた刀からはその震えに合わせてさらに血を溢れさせている。

「己一人の力で成し得たというのなら、どうして刀が血を吐いているツ？」

どうしてそんなに刀が苦しんでいるツ？答えてみるツ！

堯湖は顔を上げて「丹霄子」に向かってどなりつけた。

「丹霄子」は核心を突かれた為か、堯湖の剣幕に驚いた為か一瞬怯んだ。

「……始めにその刀で兄弟を斬ったのは姉さまだったのだろうか？」

今姉さまは何処にいる？答えろ「丹霄子」。

堯湖は額から血が流れるのもそのままに起き上がりながら「丹霄子」に尋ねた。

「丹霄子」はそこで自分が堯湖に怯んだ事実にあづき、それまでより一層怒りで体をぶるぶると震わせ始めた。真っ赤だった顔色は紫めいてきて唇は何かを呟くように動いている。

「答えろ…「丹霄子」。姉さまは——」

「……誰だよ…姉さまって…。」

「……お夕さんの事だ…今お夕さんは——ッ？」

——熱い……？

堯湖は自分の腹に焼けつくような感覚を感じた。その直後激痛と内側を抉り取られるような不快感に襲われそれは続き、みるみる体の力が抜けていく。

堯湖の腹に「丹霄子」の刀が突き刺さっていた。

「ッ……関係ねえッ！関係ねえッ！関係ねえッ！関係ねえッ！」

俺がやったんだ！全部この俺がやったんだッ！

出来もしねえくせに馬鹿にしゃがってッ！見てもねえくせに馬鹿にしゃがってッ！

俺をっ…俺を馬鹿にしゃがってッ！」

「丹霄子」はぐりぐりと堯湖の腹に己の刀を押し込んでいった。

堯湖は両手でその刀身を掴みそれ以上の侵入を防ごうと耐えた。

刀身を握る手に刀が食い込む。肉が切れる。血がにじむ。

そこからまた何かが体の内側に入り込み何か己の力を奪っていく。刀身をよく見ると自分の腹と握り込む指の辺りから「丹霄子」の刀の柄を指して赤い流れが出来ているのが見えた。

——力を…吸っている……。

堯湖は次第に朦朧とする意識の中その流れを眼で追った。

刀を掴む指の力が抜けていく。両手が力無く刀から滑り落ちた。

「…殺すッ……ッ……てめェみたいな生意気な奴は殺すッ……！」

それで俺はここから出て行く……ッ……ハハッ……ハハハハッ！」
近くにゐるのに遠くで「丹霄子」の笑い声が聞こえる。それ以上に自分の心臓の音が体中に響いて聞こえる。痛みとなって響き渡る。まるで命の警鐘を鳴らすように……。

——僕も……死んでしまう……。

堯湖は薄れゆく意識の中でそう思った。悔しかった。例え一生外に出れないとしてももっと生きたかった。もっと自分に出来る事を、したい事を出来るだけしたかった。

でも——

堯湖はそのまま後ろへゆっくりと仰向けに倒れた。その上に嬉々として「丹霄子」が馬乗りになり満身の力を込めて堯湖の腹に己の刀を突き立てる。

——僕がここで死ねば……全てが終わる……。

堯湖は浅く息を吐き目を閉じた。まるで安らかな眠りに就こうとするかのように……。

そんな堯湖の穏やかな表情に気づいた「丹霄子」がさらに堯湖の体の奥深くへと刀を差し込んだ。刀はすでに堯湖を貫通している。堯湖は痛みに顔をゆがめたが叫び声一つ上げずそれに耐えた。そしてその顔はやはりどことなく穏やかなままだった。

「……ッ気に食わねえなアッ……。

もっと絶望しろよっ……もっと苦しめよッ！もっと怯えろヨッ！
いてエだろ？「白子」！

なのになんでそんな落ち着いた顔してんだよっ……！

糞がッ……詰まんねえだろっ……このッ！」

「丹霄子」はぐりぐりと刀を動かした。

それでも堯湖はきつく目と口を閉じそれに耐えている。

「っ……てめェ……自分だけ死んで楽になるつもりだろ……？」

それで終わるとか考えてるんだろ……？

はッ……そうだな、確かにてめェはそれで終わるな……。

だがそしたら俺は女共を殺しにかかる。

男殺しやもうここから出られるとか関係ねえんだよ……全員皆殺しだ……。

今まで散々俺を馬鹿にしてきたんだからなァ……。

特にてめェのすかしたあの母親、心の臓を一突きなんて優しい殺し方はしねえ…。

じっくりいたぶって喉が枯れて声も出せない位になるまで鳴かせてから逝かしてやるよ————」

——………・・

もう一人の自分がしたとか…そういう事を僕はもう言うつもりはない。

例え自分の中のわからない自分だろうと、それは確かに僕の中のもの事なのだから……。

それにその時の僕は確かにその部分を感じていたし、その部分の自分がする事を許していたのだから……。

——心臓の音が……よく聞こえる。

「……あ？」

「丹霄子」は一瞬何が起きたかわからずに固まった。そしてそれに気づき堯湖に突き刺していた己の刀から手を離しそれから逃れようとした。

「イツ……あつがあ……ひッ……」

「丹霄子」の胸には堯湖の刀が突き立てられていた。

その刃はあばら骨に阻まれ深く突き立てられてはいなかったが、純白だった堯湖の刀をみるみる朱へと染めていく。

「やめロオッ！いてえッ……いでエよ……ッ！」

「丹霄子」は先程堯湖がしていたように堯湖の刀を掴みそれを引き抜こうともがき、逃れようと後ずさりした。

自信に溢れ不敵に笑みを浮かべていた表情はすでになく、痛みと己の死を恐怖したその顔は青じらみ絶望を浮かべていた。

堯湖は腹に「丹霄子」の刀を突き刺したまま起き上がり「丹霄子」の胸に己の刀を突き立てていった。

「やめッ……いッ……いてエよッ……やッやめろよ……ッ！」

「丹霄子」が絶叫した。そして兄弟の亡骸に行き止まりそのまま仰向けに倒れた。

堯湖はその上に馬乗りになり両手に力を込めてその胸に刀を突き立てていった。

そう……先程「丹霄子」がそうしたように……

けれど堯湖の表情は決して先程の「丹霄子」と同じものではなかった。

むしろ今の「丹霄子」と同じ表情を浮かべていた。

……殺める者の痛みとその死を恐怖する絶望に青ざめた顔を……

「やだよオッ……死にだくねエよ……ッ！」

「丹霄子」の胸元から血は流れない。一切の血が堯湖の刀の中へと

流れていった。

——どくどくどくどく……。

刀を通して「丹霄子」の絶望と早鐘の様な心臓の音が伝わる。

「……あ……ウ……。」

「丹霄子」の指が刀から離れた。浅く息を吐きながら何も見えないような遠い眼差しで虚空を見つめている。それはもう生きる事から離れた顔だった。

——とく…とく…とく……。

次第に弱まる「丹霄子」の胸の音。それとは対照的に温かみを増していく自分の刀。

堯湖は涙していた。けれどその死から決して目を逸らさなかった。

——僕は…死にたくないと呼ぶ者を手に掛けているんだ…。
だから——

堯湖は最後に己の満身の力を込めて「丹霄子」の胸に己の刀を突き立てた。

「丹霄子」のあばらが砕けずぶりと深く刀が刺さる。
刀は完全に「丹霄子」の体を貫いていた。

——僕は…決して目を逸らしてはいけない……。

「——…。」

刀を流れる血の流れが止まった。そして堯湖の刀は深い命の色をともしていた。
温かく、炎のように揺れる紅。かがり火に照らされたそれはとても美しかった

「丹霄子」は絶命した。

九

何処までも何処までも続く荒野…。
枯れ木が思い出したように傾いている。

——いつそ何も無い方が侘しくないというものを…。

「紅」は妾集落の入口の門に寄りかかりながらその殺風景な風景を眺めていた。
背後に人の気配を感じる。「紅」はゆっくりと後ろを振り返りその者を捉えた。

「……さすが剣帝殺しだな。

「それ」すら奪うか……。」

「紅」は冷めた目で門のかがり火にうつすらと照らされて堯湖を見つめながら呟いた。

堯湖の両手には刀が握られていた。

一つは「丹霄子」の命を吸い紅く染まった己の刀を…。

そして今一つは集落の兄弟の命を吸いつくし堯湖の血を吸った――
今だ紅蓮に息づく「丹青子」の刀を……。

「奪いたくて…奪った訳ではありません。」

堯湖は疲れを見せながらも強い眼差しで「紅」を見つめて言った。

――「丹青子」は絶命した。

堯湖は刀の柄を握りしめその手に己の額を当てながら声を限りに泣いた。

広場には堯湖とかがり火以外に音を発するものはない。
ただただ堯湖の悲痛な声と時折はぜるかがり火の火の粉の音だけが響き渡った。

堯湖がそれに気づいたのはひとしきり泣いた後だった。
目を開けると自分の腹に「丹青子」の刀が貫通している。
けれど先程の苦痛が嘘のようにそこに全く痛みを感じない。まるで――

――まるで…僕の体の一部のように……。

堯湖は「丹青子」に突き刺した刀から手を離し己の腹に刺さる刀の柄に触れた。

――とくとくとくとくとく…

——僕の命に合わせて……生きている。

堯湖は己に刺さる刀の柄を両手で握ると一息にそれを引き抜いた。引き抜く時そこに痛みが走り血が溢れた。まるで体の一部が引き離されるのを拒むかのように……。そしてそこには先程のような体を廻る不快感はなかった。

目の前の「丹霄子」の亡骸に刺さる自分の刀と同様に赤い命を揺らしている。

「丹霄子」の刀は完全に堯湖のものとなっていた。

「何故……僕にこんな事をさせたんですか？」

答えて下さい……姉さま。」

「紅」は寄りかかっていた門から体を離し堯湖の方を向いてまっすぐに立った。

集落の門の内と外。数歩先にいる「紅」が内にいる堯湖にとっては全くの別世界に立っているように感じられた。

「お前が全てだからだよ……堯湖。」

父様が死んだ事。「霾」が野放しになった事。「猩」に様が行方をくらました事。そして私が旅人にならなければならなかった事。その全ての原因がお前にあったからだよ……堯湖。」

「……姉さま。」

「何故原因のお前が生きている……。何故原因のお前が何も知らない。何故原因のお前が「霾」を何とかしない……。それが許せなかった。」

「……僕には何も……出来ません。そんな力なんて……ありません。」

僕は——」

——父様の……「恥」……。

「何も出来ないだど？出来るはずなんだよッ：お前ならッ！
父様の刀を真っ二つにした刀の持ち主のお前ならなッ：！」

「え……………」

——父様の刀を真っ二つ…？

堯湖は自分を睨みつける「紅」を見つめた。

「そうだ…。あの日鍛錬場で父様は「猩」にいやと手合わせをした。
私は鍛錬場に向かう「猩」にいやに会っている。
「猩」にいやは私に言った。」

——見てごらん？「紅」。これは僕達の兄弟の刀なんだ…。
綺麗だよね…純白なんだ。母親の腹を裂かずに生まれてき
たからなんだって…。

——そう…これから鍛錬場へね…。
父様がこの刀と手合わせしたいそうなんだ…。
この持主の子はまだとても小さくて相手を出来そうにない
から。

うん、私が相手役を…はは…もちろん嫌だよ…父様はすぐ本気にな
るから…。

——どうだろうね…。
確かに優しい刀だけれどとても芯のある刀のようだから…。

——わかったわかった…。
必ず行くよ…じゃあまた後でね。

「……しばらくして鍛錬場に入った者が父様の亡骸を見つけた。私は「霾」が来る前にそこに駆けつけていた。

そこに「猩」にいい様の姿はなかった。

そこには父様だけが倒れていた。

心の臓を一突き。そしてその傍らにはお前の刀と――」

「――父様の真つ二つに折れて黒ずんだ刀が転がっていた。」

「……それは。そんな……父様が僕の刀を使っていたのでは……」

「それは「霾」が流した嘘の事実だッ！

考えてもみろ！どうやったら「西の指」の剣帝といわれる父様を一突きで殺せる？

例えお前の刀だったとしても動きまで鈍るものではないだろう？

父様は己の刀をお前の刀に折られたんだ。

刀は己の命の一部。主が死ねば刀が死ぬように刀が死ねば主も死ぬ。そんなゆつくりと死に向かう父様の胸に「猩」にいい様は――。」

そこで「紅」は口を閉ざし下を向いた。その両の手がきつく握られている事に堯湖は気づいた。

「しばらくして「霾」が来た。「霾」は父様の亡骸を眼にすると絶叫しその場にいた者達を全て殺した。そこに生きているのは「霾」と私だけになった。

しばらく「猩」にいい様に対する呪詛の様な罵詈雑言を吐き散らしていた。そして「霾」は私に気づき言った……。

――「紅」……俺の子を産めよ……。

刀を持つ男と女、同じ父を持つ兄と妹、より強く色濃い血を交えれば父様を超える鬼子

を生す事が、引いては「猩」に様を倒す事が出来るだろうと…。冗談じゃない、誰があんな気違いの餓鬼なんか身籠るか…。誰が「猩」に様に仇なす事に力を貸すか…。

その当時まだ私の力は「霾」と大差なかった…。だから私はあいつと一戦交えて御殿を何とか後にする事が出来た。それ以来ずっと「霾」の追手から逃げている。

そしていつの間にか私は旅人となっていた。」

皇女でありながら常に各地を転々とし、真実を知らながら手を打つ事の出来なかった「紅」。

その果てに身につけた処世術と知識。そして自由という名の孤独。そんな「紅」の絶望に自分の理想を求め懂れていた呑気な自分を堯湖は恥じた。

俯いていた「紅」が顔を上げ真っ直ぐな鋭い視線で堯湖を射抜いた。

「お前に関わりのない事じゃないッ！お前の「命」が生じた因果だッ！

多くの一族が血染めになりながらお前だけ血に染まらずに生きるなど私は許さないッ！

責任を取れッ！堯湖！」

——そう……その目的の為に貴女はここへ来たのですね…。

でも……僕は………。

「……つまり姉さまは僕に「霾」というに様の命を断てと仰りたいのですね…？」

「そうだ……。『霾』を殺せ…。

それでお前が死んだとしてもだ。その行動を起こせ…。まずお前がしなければならなかった事だ。

兄弟が兄弟を殺し、犯し、虐げる…。そんな一族の因果を断ち切る責任がお前にはあるのだからな。」

「一族の因果を断ち切る責任…。」

「そうだ…。」

堯湖は己の両の手の刀を見つめた。そのどちらも兄弟の血を吸った忌むべきものだった。あの恐怖と絶望が、手の平を打つ次第に弱まる命の鼓動の感覚が蘇る。

——責任はあります。…けれど僕は…。

堯湖は「紅」の顔に瞳を戻した。そこに決意の光を宿らせて…。

「それでも僕は「霾」というに様を殺しません…。」

「…：臆したのか？ならば…。」

「紅」は己の刀に手を掛けた。そこにはすでに鞘抜けを防ぐ縄紐は結ばれていない。

滑らかに刀は鞘を走り抜けその深く赤い色を露わにした。

「ここで私に斬られて死ね…。」

そしてその刀を私によこせ。

父様の「命」を絶った刀だ…。少なくともそれにも充分力はある。

それで私は「霾」を討ちに行く…。」

「紅」はすっと刀を構えて目を細めた。

恐らく始めに草原で会った時より激しい殺気を放っているに違いない。

けれど門を隔てた位置に立つ堯湖にその気を感じる事は出来なかった。

堯湖は数歩先で構える「紅」を目にしながら、構える事無く刀を握った両腕を自然に垂らしたままで言った。

「兄弟が兄弟を殺める因果を断ち切る方法として僕はその因果を使いたくありません！」

僕は二度と一族の者を手に掛けたりしたくありませんっ！

僕は誰の命も奪わない方法で一族を救いますっ！その方法を探してみせますっ！」

「紅」は堯湖を見つめて薄く笑った。

「……誰の命も奪わない方法を探すだど……？愚かな……。今この時もどこかで一族の者が命を落としているというのに――。」

目の前にいた「紅」の姿が消えた。次の瞬間、背後に「丹霄子」とは比べ物にならない程重く荒々しい殺気が突如として生じた。

背後を振り返ると己に背を向けてすらりと綺麗に立つ「紅」の姿があった。

「姉さま……？」

「……私は待った。：私は探した。これまで随分と時間をかけた。その術を知り目の前にしながら私はもう待つ事など出来ない……。」「かがり火の炎がはぜた。」

「私によこせっ！その刀ッ！」

次の瞬間「紅」が左の脇腹に柄を構え堯湖に向かって突進してきた。それは明らかに突きを狙った構えだった。

心の臓を一突きで捕え確実に堯湖の命を奪おうという動きだった。

初めて堯湖と出会った時に見せた動きの何十倍もの速さの動きだという事が堯湖にはわかってしまった。

そう：「わかってしまった」のだ。

両手に握る刀の先端にまで己の感覚が行き渡るのを堯湖は感じた。それまでわからなかった自分の中の部分、それが手に取るように感じとれた。

実際それはこれまでずっと堯湖の手の中に握られていた。それは自分の刀から発せられたものだったのだ。

自分の鼓動に合わせて刀も息づく……。それは今まで純白だった堯湖の刀にはない感覚だった。刀の力が己を生かし己の力が刀を生かす。堯湖は刀が本当の意味で生まれた事をその時悟った。

あまりにあっけなかった。

初めて「紅」に会った時無意識に読んでいた刀の動きが刀を通して堯湖にもはっきりとわかるようになっていた。

……………遅い。

堯湖は「紅」の突きをゆっくりとかわすとその刀身に己の刀、もとは「丹霄子」のものだった刀を振り下ろした。

本気を出したら折れてしまう……。

そんな予感がした。堯湖は加減しその刀が「紅」の手から離れる程度の衝撃をそこに与えた。「紅」の手から刀が離れる。堯湖はそのままそれを刀で己の背後にほおった。

少し離れた所でかしゃんと刀が落ちる音がした。

「紅」は何が起きたのかもわからず突進した勢いそのままに激しく転んだ。

崩れ落ちた体勢のままこちらを振り返ろうとする「紅」の鼻先に堯湖は己の刀を突き付けた。

「紅」は肩で息をしながらそれを見つめ堯湖を見上げた。

まるで、化け物でも見るかのように……。

——きつと僕はこれから…刀を振るう度に人からこうした目で見られるのでしょうか…。

堯湖は「紅」の鼻先から刀を引き「紅」の傍らを通り過ぎた。

そしてそのまま真っすぐに集落の門を目指した。

「待て堯湖！何処へ行くッ？」

「紅」は崩れ落ち膝について座ったまま堯湖に呼びかけた。

「…御殿に行きます。」

そして「霾」に様に会ってきます。」

「……それでは…。」

「いいえ……僕はもう一族の誰の命を奪うつもりはありません。」

お互いの命を奪わず、一族の誰もが生きられる方法を見つけます。」

「……そんな事……無理だ…。」

「紅」は悔しげに唇をかみしめて呻くように呟いた。

「どうして…どうして殺してくれない…。」

今のお前ならそれが簡単に出来る。それなのにどうして……どうして私達を救ってくれない…。」

「……救います、必ず。……母様達をよろしくお願いします。」

堯湖はそれだけ言うとは振り返る事無く集落の門を目指した。

荒野の地平線の空は青白み前方より朝日の香りが立ち上る。

すでに夜明けが迫っていた。

荒野に思い出したように傾ぐ枯れ木が、その光を受けてその根元から細く長い影を伸ばしそれまで味気なかった荒野に文様を広げる。

堯湖は眼を細めてそれを見つめ集落の門の前で息を吸った。

——綺麗だ…。

堯湖は門に向ってまた一步前へと踏み出した。そこに結界の薄い膜を感じたが今の堯湖を阻むものではなかった。

堯湖は門の外へと一歩足を踏み出した。

【裏置き】 血刃の妾集落（下）（後書き）

言い訳タラタラ作るにあたって終心表明

とりあえず誤字脱字つじつま合わず必至のともでも作品間違いなしである自信を持って言える事でしよう！相変わらず最悪です！はい！

さてさて初心表明ならぬ終心表明と相成った訳ですがぶっちゃけ今回の話、途中から……。

———疲れた……非常に疲れた。

以前宣言したと思いますが自分、小説なるもの初めての人間ですのでこんな長ったらしい文章を書くのは卒論以来でして…。

いやあ……堯湖というメガネ人間のメガネのフレームがいかにか形作られたか書くのは楽しいって言ったら楽しかったんですがねえ……いかんせん長くて疲れました。

なので色々細々としたエピソードは全て省き、ピンポイントだけしか書きませんでした。てか書けませんでした。（疲れて）

そうですねえ……なんかこう「紅」との触れ合いエピソードを散りばめるべきだったと思っております。

まあ……いつか気が向いたら話の間に追加して調整しようかなあとは思ってますが、予定は未定です。

ていうかこの話…普通に皆さんお気づきでしょうが———

———終わってない…ですよ。

区切りのここがベストと判断した為ですがそれじゃ今の堯湖とつながらんとお思いの方がほとんどでしょう。

そんな訳で要約してここに堯湖が「極楽貪主」の護兵になったいきさつを書いておきたいと思います。

〈その後の要約〉

集落を出た堯湖は御殿に行きました。

本殿にいる「霾」の所までそこを守る護兵を峰打ちだか何だかして突破して辿りつきました。

「霾」は馬鹿ですが相手の力量が読めない人間じゃありません。すぐに堯湖が恐ろしく強い事に気づきました。（そして命乞い）堯湖は「霾」を殺すつもりはなく、「霾」に兄弟殺しや虐げをやめるよう言いました。

でもそれまで集落に閉じ込めてた自分の寝首をいつかどこかで掻くに違いないと「霾」は信じて疑いませんでした。

そこで「霾」は己の意思で差出しさへすればどんな屈強な者の魂でも永遠に縛るという「西の指」の「極楽貪主」の所に奉公に出るならその申し出を飲んでもいいと言いました。（何だか色々やりとりがあった模様。友人とかじゃなく商売仲間って感じでですかね。）堯湖は本や「偶湖」の話で「極楽貪主」がどんな人物か知っていました。信用はならないけれど「霾」と共謀して自分の命をだまし取る、そんな事はせずむしろその複雑な命のやりとりの関係を長く愛でて楽しむ人物だと考えました。そこで堯湖はそれでOKしました。早速「霾」は「貪主」に無償で一族最強の男を貸し出す代わりにもしもの時は「貪主」にその魂をくびるよう依頼。「貪主」はそれを快く了承。

そして堯湖は「貪主」の護兵となり今に至るという訳です。

（宴休みやたまにお暇もらって集落に帰ったりしています。）

…とまあ、堯湖のいきさつはこんな所です。
さてさて今回のこの話の登場人物設定のようなものを載せて終わりにしたいと思います。
では、また…。

登場人物設定

「堯湖」…今回のこの裏置きの主人公。この時の見た目年齢は12から13歳って所でしょかね。さて彼の得物が赤い刀の二刀流という事ですが、はっきり言ってそれ、堯湖の腹に刀が刺さった時点で決めました。

堯湖の得物どうしようかの経過を語りますと「普通の刀」↓「一族の血を吸って強くなる刀」↓「一本の白い刀案」↓「赤くなっちゃった一本の白い刀案」↓「赤くなっちゃった白い刀と「丹霄子」の死んだ黒い刀案」↓「最終案」となった訳です。だけどこれ、無駄に堯湖を強くする結果になっちゃって本当良かったのかなあとちょっと考える今日この頃です。

「紅」……堯湖の義母姉。見た目年齢は22、3歳位でしょうか…。

はっきり言ってあの初登場のシーンを書くまでその存在すら考えていなかった人物です。じゃあこの話どう作るつもりだったんだと言われたら本当になんとお答えしていいものやらって感じですねえ…。
(はっきりいって自分、いつもラストしか考えていません。)

今回のこの話で始めに考えていた事は堯湖が主人公で、集落から出て行く、これだけでした。あとは書きながら勝手にだらだらです。)

堯湖を集落から出すには契機が必要：じゃあ敵だ！（短絡メガネ設定）とまず考えました。

結構男にしようか女にしようか悩みましたが、集落の奴等がやけに男女区別にうるさかったので強い女を出そうと思いました。

で、結果が「紅」です。

そして「紅」という名前の姉が生まれた事によりあと三人強い兄弟が必要だと考え、「ばい霾」「かげ翳」「しょう猩」が生まれました。（この時点で「霾翳猩紅」死亡案が浮上）

あとはこの四人をからめて何とか堯湖を外に出せないものかと模索で、結果がこのお話です。つまり「かげ翳」はあぶれです。名前も存在感無いし御殿の奥でうじうじさせとけばいいやと……つまりやっぱり適当です。

さて、集落での偽名が何故に「お夕」かというところ夕方集落入りしたからです。（適当ここに極まれりですね）

「しめんこ偶湖」：堯湖の実母。見た目年齢30歳前後。名前の由来はとりあえず堯湖との関連付け、ただそれのみです。人柄も堯湖のメガネを作り上げるに足る教育ママ（転じて高い知性の持ち主）と考えてこうなっていました。

書き終えて考えたのですが堯湖の強さが尋常なものではなくなってしまうのでこの母親の血筋も実は高名な誰その御落胤的な設定にしていこうかなと今更考えている所です。

「たんしょうじ丹霄子」：堯湖の力を開花させる為のかませ犬としか言いようがありません。（酷い……）「紅」は堯湖と戦うけれど殺すのはちょっと、じゃあ誰が堯湖の力を引き出す為に死ぬかとなった時にぽつと出て出来た悲しい人物です。あまりにかわいそ過ぎる役なので出来るだけ死んでもいい(?) ような性格にしました。

ちなみに名前は「丹霄子」（赤く染まった空の子、のちの「霾翳猩紅」設定を見ていただければわかりますが彼との関連付けです。）

という意味です。可哀想なので名前だけはちゃんとした強そうなのを付けてあげようと思いこんなになりました。でも何だか文字だけ見ると何かの丸葉みたいに見えるのは自分だけでしょか…。

「ばいはいしやうこう霾翳猩紅」：「西の腕」の剣帝と名高き堯湖の実父。見た目：全然思いつきませんでした。

自分は絵を描くのが好きなので自分的登場人物理想像を色々描いているのですがこの人についてはアメーバ（転じて形すらない）にかなりませんでした。

無骨、優男、幼年、青年、中年、壮年、老年、温和、いきなり変態などと色々考えていたのですがどれで行っても色々行けそうだなアと……。なのでとりあえず無しです！皆さん適当に妄想してください！（そんなもんです、自分の想像力なんて…。）

さてこの人の名前ですがとりあえずキーワードを決めて結構悩みました。

キーワードは「偉そう」「偉いので」「しやうごう肆号」↑4文字の難しそうな名前」「貪主みたいに語呂が良くてその人っぽい意味のある言葉」「血もしくは刀を連想するもの」……等々。

始めは堯湖が福音（自分のリアルに所縁ある名称）なのでそれ系でいこうかと思ったのですが「偉い人」だからなアと却下しました。で、結果が「霾翳（巻き上げられた土砂が空を覆って暗い）猩紅（あざやかな真紅の色）」になりました。

「猩紅霾翳（赤い巻き上げた土が空を覆う）」の方が意味が綺麗に通るなとも思ったのですが「しやうこう猩紅」転じて「しやうこう将校」（偉そう）と思ったのでこの並びにしました。（つまりこの人しようもないダジャレ名前です。）

とりあえず主要な所はこんな所でしょか？

にしても本当に舞台裏書くと自分の作品ってなんて適当というか
んというか……。

後々この設定がどう影響していくか戦々恐々ですねえ…。

2008年9月15日

というのが前回でした。

今回の感想……やはりつじつまが……文面も……（恥）

そうそう、これまだ残暑の時に書いたのですよねえ…。

我が家はクーラーつけないので最悪室内で36度いくのでまさに地
獄の冥獄でした。↑パソコン熱でさらに加熱

まあうだった頭で書いたものですので（ふうん…）と流していただ
ければこれ幸いです。（まあうだってなくても拙文ですが。。。）

また宜しく願います。

ではまた…。

2009年3月26日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9906j/>

冥獄抄散話（めいごくしょうさんわ）置物語

2010年10月28日02時49分発行